令和５年４月２８日
防衛大学校同窓会機関紙

小原台だより

開校 70 周年記念事業　歴代学校長レリーフの贈呈

電子版第８号

◆防衛大学校同窓会長からのご挨拶

◆学校長に聞く

◆防衛大学校関連
◇新副校長（中野俊樹氏）に聞く
◇令和４年度カッター競技会
◇第６９期期生会創立総会
◇令和４年度水泳競技会の観戦及び激励について
◇令和４年度同窓生等による著作の贈呈
◇令和４年度防衛学持論研究レポート発表会への参加
◇令和４年度断郊競技会激励

◆同窓会は今
◇第６６期生に聞く
◇今人生、真っ盛り（２８期生）

◆活動報告
◇令和４年度防衛大学校同窓会代議員会（実施報告）
◇第４５期生ホーム・ビジット・デー（ＨＶＤ）
◇第８期・第９期ホーム・カミング・デー２（ＨＣＤ２）
◇第２２期生ホーム・カミング・デー（ＨＣＤ）
◇第２４回防衛大学校同窓会ゴルフ大会
◇第２５回防衛大学校同窓会テニス大会
◇第２２回防衛大学校同窓会囲碁大会

◆会長ルーム・活動録
◇防衛大学校開校７０周年記念事業
◇防衛大学校令和４年度開校記念祭及び顕彰碑献花式への参加
◇令和４年度防衛大学校卒業式典への出席

◆連絡事項
◆編集後記

◆防衛大学校同窓会長からのご挨拶

防衛大学校同窓会長　村川　豊

防衛大学校同窓会会員の皆様に一言ご挨拶申し上げます。本年４月、岩田前会長の後を受け、防衛大学校同窓会会長を拝命しました村川（第２５期、海上要員、国際関係論、剣道部、神奈川県出身）です。「同窓会の役割は何よりも母校の充実・発展への寄与にある」という岩田前会長の方針を引き継がせていただくとともに、同窓会会員相互の親睦交流のため微力を尽くす所存ですので、よろしくお願い致します。

現在、防大では久保学校長の卓越したリーダーシップの下、「中長期ビジョン」が策定され、「自衛隊のリーダーを育てる日本唯一の最高学府・世界水準の士官学校」「安全保障・防衛学の研究拠点」「国際交流の拠点」を目指し、環境の変化に対応しつつ着実に校務が運営されております。

昨年度は開校記念祭に合わせて創立 70 周年記念行事が開催されました。本年３月に第６７期生が卒業し、４月には第７１期生が入校しました。多くのご来賓が見守る中、盛大かつ整斉と式典が挙行されました。卒業式には岸田内閣総理大臣が来校され、卒業生に対する訓示を実施されました。

なお、第７１期生から女子学生の数は約１００名となります。３０年前に第４０期生において初めて約４０名の女子学生が入校したことと比べると、隔世の感があります。

また、卒業式では、久保学校長からのご招待をいただき、ホーム・カミング・デー（ＨＣＤ）行事として第２２期生が、そして入校式ではホーム・カミング・デー２（ＨＣＤ２：入校から６０年経過した卒業生）行事として第１０期生及び第１１期生が来校され、懐かしい小原台において同窓生相互の親睦交流を図るとともに、本科及び研究科学生との絆を深められました。コロナ禍も収束の兆しが見える中、同窓会としても、すばらしい伝統行事の復活と継承に尽力したいと考えております。

次に、同窓会の現状について申し上げます。

昨年度も一昨年度に引き続き、新型コロナ感染症拡大の影響を受け、防大における諸行事等への同窓会員の参列等は一部制限されましたが、同窓会小原台事務局の積極

的な活動等により、ほぼ計画どおりに母校支援事業を実施することができました。また、同窓会会員相互のスポーツ等の親睦事業を２年ぶりに実施するとともに、３年連続で郵送処置による議決を余儀なくされてきた代議員会もＷｅｂ会議方式ながら代議員参加形式で開催することができました。

また、防大同窓会の会員数は現在、約２万６千名（現役自衛官約１万２千名、退職者約１万４千名、留学生約４５０名）となっております。退官者数は現役自衛官数を超え同窓会の規模としては、より充実した活動が可能な安定期に入ったと感じております。

一方で、昨年度の代議員会でも議論していただいたとおり、ここ数年の会費納入率の下落は会務の運営にも大きな影響を及ぼしております。昨年度までに検討してきた諸施策をもとに、卒業生に対し同窓会活動について正しい理解を得る努力を重ねるとともに、彼等の意見も参考に制度面での改善も図っていきたいと考えます。

現在、我が国は戦後最も厳しく複雑な安全保障環境に直面しており、周辺では力による一方的な現状変更の圧力が高まっております。先日の卒業式において、岸田総理は「今日のウクライナは明日の東アジアかも知れない」と強い危機感を表明されました。こうした情勢の中にあって、自衛隊内はもとより国内外においてもリーダーシップを発揮し得る高い倫理感と使命感を有した幹部自衛官の育成は、ますます強く求められていると考えます。このような観点から、同窓会役員及び事務局一同は、母校の充実・発展のため、一層の支援を推進していきたいと考えております。一方、これらは「母校のため、後輩のため」という同窓会会員の皆様の強い思いと物心両面でのご支援がなければできるものではありません。

皆様からのより一層のご支援ご協力をお願い申し上げ、甚だ簡単ではありますが、会長就任にあたってのご挨拶とさせて頂きます。

令和５年４月吉日
防衛大学校同窓会長　村川　豊

【　村川　豊（むらかわ　ゆたか）　略歴　】

25 期、海上要員、国際関係論専攻、剣道部

昭和 33 年	神奈川県出身
平成 21 年	阪神基地隊司令
平成 22 年	海上自衛隊第 4 術科学校長
平成 23 年	海上幕僚監部人事教育部長
平成 25 年	補給本部長
平成 27 年	海上幕僚副長
平成 28 年	海上幕僚長
平成 31 年	退官
現　　在	株式会社ＮＴＴデータ特別参与

◆学校長に聞く

防衛大学校長　久保文明

周知のように、昨年防衛大学校は創立 70 周年を迎えました。

71 年前、独立を回復したばかりのわが国は、警察予備隊さらには保安隊を創設して自衛力の保持を決意し、それは昭和 29 年自衛隊の発足に繋がります。吉田茂総理大臣はこれについて当初逡巡したようですが、いったん自衛力保持を決断したのちは、その幹部を養成する機関のあり方に強いこだわりを示しました。拙速な形で戦闘訓練をさせるよりは、民主主義を理解実践させた上で一般大学の学生と同様の学習をさせ幅広い教養を持たせること、科学性・合理性の教育を重視した学校にすること、そして何より、戦前陸軍と海軍が別の士官学校を擁していたのと反対に、それらが統合された一つの学校になることを強く望まれました。その基本的方向性において、こうした考え方はきわめて妥当なものであり、本校の基礎を固めるのにきわめて重要な役割を果たしたといえます。

創立以来、本校は、陸海空自衛隊を率いるリーダーを輩出してきました。われわれは誇りと自信をもって、これまで 70 年の成果を国民に語ることができます。

しかし、同時に本校は、過去の成果に胡坐をかいてきたわけではありません。70 年の間に時代の要請に応え、また国際環境の変容に対応して、防大はそれなりに大きな変化を遂げてまいりました。専攻には人文社会系を含むようになり、大学院に相当する研究科前期・後期を立ち上げ、また受入・派遣双方で海外との交流の機会も増やしてきました。近年はグローバルセキュリティセンターといった研究センターも立ち上げ、研究機能も強化しています。30 年前の第 40 期に始めて女子学生が入校した際、その人数はわずか 40 人弱でしたが、現在は 70 人であり、本年 4 月からは 100 人となります。これまた本校にとっては大きな変化であります。教官と学生、そして学生間

の関係も変わりました。

そこでいくつかの点に絞って、防大の現状についてご報告し、どのような方向性を探っているかについて大まかに記させていただければと思います。

防大と内幕の相互理解の深化とコミュニケーションの円滑化に貢献している仕組みとして、防衛大学校を充実・強化するための防衛省内の会議があります。私が赴任する少し前に立ち上がりました。事務次官が座長を務め、統合幕僚長、陸海空幕僚長、官房長、衛生監、そして人事教育局長が出席してくれます。ここで、防大が直面する諸問題について率直に意見交換することができます。防大は、ご存じのように本省に置かれた施設等機関であり、防衛省内で高い地位をいただいています。予算を含むさまざまな課題については内局に相談しておりますが、エンドユーザーたる各自衛隊の声と防大の希望が相互にやや届きにくい環境にあります。その意味で、この会議の存在は防大、内局、各自衛隊の認識を共有する画期的な場です。

最近は防衛省内の様々な会議に防大学校長も呼ばれるようになったのも、防大にとってはよい効果をもたらしていると感じます。直接防大が議題になることはあまりありませんが、防衛省・自衛隊で起きていることを知り、防大内で認識を共有することができるようになりました。

そこでの議論に触発されて取り組んだのが防大独自の中長期計画の策定でした。ご存じのように中期防衛力整備計画（中期防）というものがあります（今回から「防衛力整備計画」となりました）。しかしそれに見合う中長期計画が、大規模施設の新築・改築を除外すると防大にはありませんでした。そこで、令和 3 年末にその作成を開始しました。中期防は 5 年が単位でしたが、こちらは 10 年程度を視野に入れました。最初はゼロからのスタートですので難航しましたが、ともかく令和 4 年春には形をなすくらいにはなりました。さらに工程表もつけ、視覚的に 5 年後 10 年後にはどの程度まで進展するのかがすぐにわかるようにしました（この工程表方式は私が内閣府の宇宙政策委員会宇宙安全保障部会の委員をしている際に学びました）。さらに各年度で達成された成果をもとに毎年改定していくことにしました。

むろん、これらは枠組みや手法の話でして、いうまでもなく実質として何を目指すのかがより重要です。それについては、学生舎生活環境の改善、研究・教育・訓練施設の充実、メンタルヘルスへのより大きな配慮など、さまざまな項目を盛り込みましたが、サイバーなどのいわゆる新領域における教育の強化・拡充、留学機会の増加を含めたより一層の国際化の推進、研究基盤の拡充などをとくに重視しています。

サイバー教育については、防大生全員のサイバー・リテラシーを上げるための措置と専門的な教育の拡充を考えています。

留学生関係では受託教育（主に東南アジアからの留学生。5 年間防大で過ごす）で教

員増を実現し、人手不足を解消したいと考えています。ちなみに、留学生協力家庭(ホストファミリー)の皆様に対しては、昨年からカッター競技や演劇鑑賞会など校内行事の一部について招待状をお送りして、留学生の活躍や防大についてさらにご理解を深めていただくように配慮しています。

防大生は、学生時代アルバイトはできず、就職活動およびそれと関連したインターンを経験することもできません。他大学の学生と交流する機会も限定されがちです。そこで、令和 3 年度から JICA(国際協力機構)のご協力を得て、JICA 本部での校外研修を実施させてもらい、今年度はそれに加えて JICA の海外(本年度はカンボジアとフィリピン)プロジェクト現場での研修も加えてもらいました。4 名の学生が合計で 4 週間程度の研修を受けることになります。このような機会を作っていただいた JICA には心より感謝したいと思います。これを通じて学生は異なった職場環境で勤務する経験を積むとともに、日本の外交を、海外援助という異なった観点から理解する視点を得ることができるのではないかと期待しています。この他にも、防大生の留学機会を増やして行きたいと考えています。

日本の防衛政策の中では研究開発費の少なさも指摘されています。短期的な装備の開発・調達は防衛装備庁が担っていますが、やや中長期的かつ基礎的な傾向を持つ研究に関しては、200 人を越える理工系教員を擁する防大が、防衛省の中で一定の存在意義を示すことができるかもしれません。一般大学は「軍事」研究を避ける傾向にありますので、ますます防大が手をあげる必要性は大きそうです。

ちなみに、来年度に関しては、防衛費増額の大方針の中、防大に関しましてもこれまで認められなかった予算がつきそうで、学生舎の生活環境の改善などは進みそうです。

懸念すべき点がないわけではありません。昨年度は任官辞退者が 70 名を越えました。新型コロナウイルス感染症により長期の隔離などが要因の一つかとも推測されますが、より長期的な要因が絡んでいるのかもしれません。注視する必要があります。また、残念ながら着実に防大の受験生が減少しています。こちらも様々な対策を講じていますが、まだ効果をあげていません。抜本的な対策が必要かもしれません。さまざまなハラスメントに関して学生の意識は近年高まったと感じますが、それだけでは十分ではありません。将来、幹部自衛官となる者としてのリーダーシップ、フォローシップのあるべき姿を引き続き追求します。

このように、まだまだ課題は残っています。新しい課題と挑戦も次から次へと登場します。安閑としているわけにはいきません。引き続き、前に進むことを検討し続けることがわれわれ防大を預かるものの責務であると肝に銘じています。同窓生の皆様からも引き続きご助言等いただければまことに幸いに存じます。

◆防衛大学校関連

◇新副校長（中野俊樹氏）に聞く

防衛大学校副校長（企画・管理担当）
中野　俊樹

本年 4 月より教育担当副校長を務めております中野です。歴代の副校長と同じく、防衛大学校の教育・研究の向上に努めていく所存です。どうかよろしくお願い申し上げます。

私は昭和 62 年 10 月に本校の電気工学教室に助手として着任以来、本校の教育・研究に携わってきました。期別で申しますと 28 期相当になります。この間、同窓会の皆様方から本校の学生に対してご厚情を賜っていることは、私の上司や先輩の教官方から伺って承知しておりましたが、副校長として学内の学生行事に関わる中で、同窓会から学生の活動に対して多大のご助力をいただいていることの有り難さを改めて痛感しております。これまでのご助力にお礼申し上げますとともに、今後とも本校学生に対しまして、ご支援ご協力の程、どうかよろしくお願い申し上げます。

本年、防衛大学校は創立 70 周年を迎えますが、新型コロナウィルス感染拡大、ロシアのウクライナ侵攻等、本校を取り巻く状況は大きく変化しております。本校の教育・研究の方向性や体制も、これらの変化に迅速かつ適切に対応するために進化させていく必要があり、そのための施策を本年新たに定めました本校の中長期計画に盛り込んでおります。以下、これら施策の一部の概要を説明させていただければと存じます。

（１）教育・研究のデジタルトランスフォーメーション

近年の新型コロナウィルスの感染拡大により対面での授業ができず、本校のみならず大学での授業はオンライン化が進みました。本校でも学生舎にいる学生が研究室や自宅にいる教官からオンラインで授業を受けられるように、遠隔授業システムを学内に構築して対応してきました。オンライン化により時間・場所に制約を受けずに授業ができるようになった反面、対面授業のように学生と教官間のコミュニケーションを

取りながら教育を進めることが難しいといった問題点も浮き彫りになっています。

そこで、教育のデジタルトランスフォーメーションを通して、学生および教官の間のコミュニケーションが双方向で高度に強化された教育を実施できるように本校のネットワークや情報システムについて検討しております。具体的には、学生に対する課題および資料をデジタル化し、学生と教官がオンライン上で資料を共有して授業を行います。さらにチャットなどのオンライン上のコミュニケーションツールを利用し、授業中に質問でき授業後に指導を受けられるといった双方向授業を学生と教官の間で実施することを計画しています。

このような ICT を活用した教育システムを利用することにより、学生が時間や場所の制約を受けずに、短時間で効率的に学習することが可能となり、教育の高度化を実現することができると考えています。ご存じの方々も多いかと存じますが、文部科学省の施策である GIGA（Global Innovation Gateway for All）スクール構想の浸透に伴い、小中学生の頃から生徒一人一人にタブレットやノート PC の端末を配布して、ICT を利用した双方向の教育が行われております。高等学校教育でも同様の授業を行う学校が増えています。

今後、防衛大学校にも GIGA スクール世代の学生が多数入校する状況を踏まえると、双方向の教育を早期実現することは、制約された学習時間や環境において一般大学以上の教育成果をあげるために必要なだけではなく、少子化の進む中で優秀な学生をできるだけ多く集める上で、本校の魅力化を図るためにも非常に重要であると考えられます。

研究のデジタルトランスフォーメーションも早急に対応が必要な課題の一つです。高速でストレスフリーな Web 閲覧による情報入手、良質な学術情報へのアクセスが可能な高品質のオンラインデータベース、高速な科学技術計算のための使いやすいクラウド基盤およびサイバーセキュリティー研究に特化したネットワーク等の研究環境の整備に基づく研究の高度化を通して、本校の学術研究レベルの一層の向上が可能となり、その結果、優秀な教官を採用・確保することができます。

また、研究のデジタルトランスフォーメーションの結果、本科・研究科学生の卒業研究において、今まで以上に学術研究を効果的に経験させることができ、幹部自衛官として必須である課題発見・解決能力の教育の高度化をも図れます。教育・研究のデジタルトランスフォーメーションは本校の教育・研究のさらなる充実・強化のために必須の施策となることから、総合情報図書館および学内の教職員が協力して次期共同利用電算機システム換装に合わせてその実現に取り組んでおります。

（２）デュアルユース（軍民両用）を考慮した基礎研究の促進

ロシアによるウクライナ侵攻以来、防衛力の強化を求める声が強まっております。

防衛力強化にとって防衛技術の基盤となる基礎研究は欠かせません。

近年の急速な技術革新により、従来の装備を無力化・弱力化するゲームチェンジャー的な装備品が出現しております。例えば、ウクライナ侵攻で高い有効性が明らかになったドローンを応用した装備品はその良い例です。ゲームチェンジャー的な装備品の開発の促進は今後の防衛力の抜本的強化に欠かせない項目です。その遂行には、デュアルユースへの可能性を踏まえて、広い科学技術分野において地道に基礎研究を行い、その成果が装備品開発への橋渡しになるかどうかを継続的に評価していくこと以外に無いと考えています。

この種の研究は、装備品の開発研究を主に行っている防衛装備庁ではリスクが高くてなかなか手が出せず、大学等の高等教育機関で行うのが望ましいといえます。しかし、日本学術会議において、科学技術を軍民両用の二分化では峻別することは困難との見解が出されているものの、一般大学では、デュアルユースを念頭に置いた研究を積極的に行っていこうとする気運はまだまだ高まっていないようです。今後、デュアルユースを意識した基礎研究は徐々に広まっていくとは思いますが、その勢いは防衛省が想定している防衛力の抜本的強化の進展に追従できるとはいえず、ゲームチェンジャー的な装備品の開発への橋渡しになる研究成果が十分に生み出されることは難しいと推測されます。

このような状況を踏まえて、防衛大学校において、デュアルユースを念頭に置いた基礎研究を一般大学に率先して進めていければと考えています。その方策として、デュアルユース志向の基礎研究を行うための新たな研究の枠組みを新設すべく、理系の教官方の協力を仰ぎながら教務部および先端学術推進機構にその実現に向けて取り組んでもらっています。

また、デュアルユースを含めた先端学術的な基礎研究機能の一段の強化を図るため、新たな研究組織の設置に向けた検討も今年度内に始めることになっております。

以上、簡単ではありますが、防衛大学校の目指す教育・研究活動の今後の方向性およびその施策について説明させていただきました。冒頭で述べました本校の中長期計画には、ここで説明させていただいた取り組み以外にも、国際交流や質の高い人材確保などの重要な施策が盛り込まれており、それらに関しても実現に向けた検討が進められております。

このような検討の一端に関われますことは、大変嬉しく、かつ、貴重な経験と感じており、微力ではありますが、これらの施策の実現に貢献していければと思っております。同窓会の皆様方には、今後の防衛大学校の充実・強化に関する取り組みにご理解いただき、引き続きご支援、ご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

◇令和４年度カッター競技会

令和 4 年 5 月 31 日（火）、令和 4 年度カッター競技会が走水海上訓練場沖で実施されました。

入校式の延期により実施が約 1 か月延期されましたが、新型コロナの影響で中断されていた学生・ご家族の応援や部外者の招待が 3 年ぶりに復活し、海からも陸からも熱気が感じられる競技会となりました。

同窓会からは村川副会長が参加し応援されました。

学校長と懇談される村川副会長

（手前中央：村川副会長、正面中央：久保学校長）

海上訓練場入口で応援するご家族

競技は、午前に予選、午後から決勝が行われ、各クルー優勝を目指し競い合いました。

予選レースは風雨と潮流の影響を受け漕艇が難しいレースとなりましたが、第１大隊１艇、第４大隊３艇がそれぞれ決勝に勝ち上がりました。

予選出艇見送り

予選レースの模様

決勝レースでは、１１クルー、４２クルー、４３クルー、４４クルーが出場し、スタートにあたり機動艇上から村川副会長が「海上自衛隊に行く皆さんは今後も死ぬほ

ど漕げますが、陸上・航空自衛隊に行く皆さんはこれが最後なので優勝目指し頑張って漕いでください。」と激励されました。

スタート時には天候も回復し、各艇とも訓練の成果を遺憾なく発揮する白熱したレースとなりました。

結果は、第４大隊が１，２，３フィニッシュを決め、４３クルーが接戦を制しました。

決勝クルーを激励する村川副会長

決勝レースのスタート

決勝レース序盤の接戦

優勝した４３クルー

競技会成績は次のとおりです。

順　位	優　勝	第2位	第3位	第4位
大隊対抗の部	第４大隊 （７３６点）	第２大隊 （３１７点）	第１大隊 （２２５点）	第３大隊 （１３６点）
クルー対抗の部	第４３クルー （１３分４０秒）	第４２クルー （１３分４１秒）	第４４クルー （１３分５５秒）	

表彰式は、陸上競技会にて行われました。大隊対抗の部では学校長から優勝大隊に表彰状、優勝旗及び伝統ある「カッター競技会優勝大隊」の看板が授与されました。クルー対抗の部では、第１位～第３位のクルーに対し学校長から表彰状が授与、村川副会長からメダルが贈呈されました。

最後に久保学校長が訓示され、贈られたメダルは、防衛大学校同窓会からの支援である旨もご紹介いただき、今年度のカッター競技会は無事に終了しました。

表彰状及びメダルの授与（”クルー対抗の部”　表彰式）

（３０期海　時久寛司 記）

◇第６９期期生会創立総会

令和 4 年 6 月 30 日（木）昼休みに記念講堂に於いて第 69 期期生会設立総会が開催され、同窓会からは磯部副会長が招待され参列しました。

当初、昨年 3 月に予定されていましたが新型コロナウィルス感染拡大の状況に鑑み、開催日を大幅に延期し、さらに、コロナの影響でスケジュールがタイトな学業への影響を最小限にするため昼休み時間に実施されました。

設立総会は、国歌斉唱、期生会役員紹介、期生会会長所信表明、学校長祝辞、同窓会副会長祝辞、同窓会からの期生会設立支援金授与、学生歌斉唱の次第で執り行われました。

出口期生会長は所信表明で「我々は幹部自衛官の卵として学びを止めることは許されない。期生会は、卒業後に幹候・部隊へ旅立つための自助公助の努力を惜しまない組織でありたい。」と声高らかに宣言しました。

また、久保学校長は祝辞において、統合運用の時代における共に任務を果たす同期生の繋がりの重要性等を話されました。

続く磯部副会長は、自身が学生だった頃の経験談をもとに同窓生の連綿とした縦の繋がりを強さについて述べられました。

音楽のみの国家斉唱

同期生の繋がりの重要性を述べられる久保学校長

磯部副会長から期生会設立支援金の授与

設立総会終了後には、同会場にて同窓会事務局から第 69 期生全員に対し、同窓会の活動概要や新たな会費納入制度等について説明を実施しました。

同窓会活動の概要を説明する橋口経理部長

（同窓会事務局 記）

◇令和４年度水泳競技会の観戦及び激励について

令和４年９月５日（月）、防大において伝統の水泳競技会が開催されました。令和２年度、３年度はコロナ感染防止の観点から学校関係者のみにより開催されましたが、本年度は同窓会に招待があり、３年振りに吉田副会長が観戦するとともに、学生を激励しました。

学校長の隣席で観戦中の吉田副会長

視察席の状況

新規感染者数が過去最大のコロナ感染第７波と重なる夏季休暇直後の開催となったため、全学生・教職員を対象に抗原検査が実施され、陰性が確認された学生・教職員のみが参加できる競技会となりました。競技会の模様 を映像で学生舎にライブ配信する等によりプールサイドでの応援者数を減らすと共に、応援する学生等は隣人と1.5m の間隔を取り、更には大声を出す応援は 禁止する等の徹底した感染症対策が取られていました。

激戦の様子

感染症対策のため人数を減らした応援

競技会は学生が企画・運営していました。また１学年による 400m 平泳ぎリレーと女子 200m 自由形リレー以外の種目は学年と性別を指定せず、大隊による対抗戦で行われました。学生は１人１種目のみ参加でき、水泳及び水球部員は個人種目には参加できない等の制限が設けられ、大隊の選手選考と重点種目の選定の如何により勝敗が決定されるという防大らしい情報戦を含む作戦の是非が問われる競技会でした。水中騎馬戦や潜水競争等開催年度により特徴ある種目がありますが、本年度はビート板と足ヒレを装着した 8 名によるフィンリレーが盛り込まれていました。また、学校職員による職場対抗リレー、8 月末に米国から来日したばかりの留学生 8 名による中隊対抗自由形リレーへのオープン参加もありました。

一方、一部の競技ではコロナに感染した、あるいは濃厚接触者に指定された学生が多く所属する中隊が欠場する等、コロナの影響が顕在化していました。

総合優勝は第２大隊でした。また、いくつかの競技では大会記録が更新される等、コロナ禍による制約が多い中にもかかわらず、随所に創意工夫が凝らされ、また選手、役員、応援団の一体感が強く感じられ、学生及び学校当局の努力により素晴らしい競技会に仕上げられていました。

表彰式は全学生・職員が参加し陸上競技場で行われ、競技会会長である久保学校長から賞状、優勝旗が受賞者に手渡されると共に、同窓会が寄贈したメダルは吉田副会長により受賞者に授与されました。また同窓会としての激励の機会をいただき、吉田副会長が「コロナ禍にあっても自主自立の精神を発揮し、記録が塗り替えられる等、素晴らしい競技会でありました。防衛大学校の良き伝統が確実に継承されていることを確認でき、嬉しく思います。同窓会はこれからも 母校の充実・発展のため皆さんをしっかり支援・応援していきます。」と学生を激励しました。　　（３０期空　森末浩史　記）

力を出し切った参加選手たち

競技半ばから第２大隊がリード

陸上競技場での表彰式

表彰式での吉田副会長からの激励

◇令和４年度同窓生等による著作の贈呈

令和 4 年度同窓会事業計画に基づき、同窓生の皆様にご推薦を頂いた同窓生等著作のうちから現役学生が希望した 48 冊を贈呈いたしました。

贈呈は防衛大学校計画により、令和 5 年 1 月 13 日（金）、同窓会小原台事務局長久保田空将補から各大隊指導官に、その後各大隊指導官から学生に対して防衛大学校同窓会の紹介とともに実施していただきました。

現役学生にとって、これら同窓生等の著書が勉学の一助となり、また、國分良成前学校長等の著作が母校や自らの生活、意識等を見つめなおす良い機会となることを願っております。

同窓生の皆様も、自身の学生時代を思い返すとともに、今の母校そして後輩たちを知る良い機会等として、一読されては如何でしょうか。

小原台事務局長から
第１大隊首席指導教官へ贈呈

各大隊首席指導教官と
小原台事務局長の集合写真

小原台事務局長から
第４大隊首席指導教官へ贈呈

第２大隊首席指導教官から学生
代表へ 贈呈

贈呈図書

第３大隊首席指導教官から
学生代表へ贈呈

【　寄贈図書一覧　】

著　　作	著　者	期　別	冊　数
現代語訳　孫子	杉之尾宜生	５	２
孫氏・クラウゼヴィッツで読み解　日本軍の敗因	杉之尾宜生	５	１
気象と戦術	木元寛明	１２	１
陸軍中野学校の教え	福山　隆	１４	１
戦場の名言	田中恒夫	１６	１
世界の動きとつなげて学ぶ　日本国防史	宗像久男	１８	１
日本人を騙し続ける支配者の真実	池田整治	２１	２
自衛隊最高幹部が語る令和の国防	岩田清文 武居智久 尾上定正	２３ ２３ ２６	６
とにかくメンタル強くしたいんですが、どうしたらいいですか？	下園壮太	２６	４
逆風に向かう社員になれ	宮原博昭	２６	１
海軍式戦う司令部の作り方	堂下哲郎	２６	１
超一流諜報員の頭の回転が速くなるダークスキル	上田篤盛	２８	１
近未来戦の核心サイバー戦　情報大国ロシアの全貌	佐々木孝博	３０	１
戦争という選択	関口高史	３２	４
現代の軍事戦略入門	平山茂敏	３２	３
防衛大学校―知られざる学び舎の実像―	國分良成	―	１６
データで知る現代の軍事情勢	岩池 正幸	―	２

（広報部　人材バンク担当　記）

◇令和４年度防衛学持論研究レポート発表会への参加

令和5年3月6日（月）に防衛大学校で実施された令和4年度防衛学特論研究レポート発表会に佐藤誠理事（26期海）、山田真史理事（28期空）、上尾秀樹理事（29期陸）が参加しました。

本発表会は、防衛学教育学群の主催で、4学年全員が前期ゼミでテーマを決めた内容をレポートにまとめ、審査を経て優秀者25名(陸上要員11名、海上要員6名、航空要員6名)の発表が実施されました。

発表会は、陸、海、空要員ごとに分かれた3会場で、3学年の全学生及び他学年で希望する学生、防衛学教育群教員、他学群教員も多数参加しました。優秀者発表が10分、その後、質疑応答が5分と防衛学における卒業研究発表会という様相でした。研究テーマは、統率、国防、軍事技術、戦略、戦史などの分野ごとに分かれ、最新の国際情勢に基づく防衛戦略・戦術、AIや自律化無人兵器等の軍事科学技術、リーダーシップに関する研究、各種戦例からの戦史研究等、各学生が興味を持って取り組んだ研究テーマとなっていました。

各理事は、陸海空要員の各会場での発表終了後、各要員の学生に対して講評・激励するとともに、表彰式において発表した優秀者25名に対して防大同窓会からの記念品(盾、学生像トロフィー、万年筆の3種類から学生の希望で選択)を贈呈しました。

防衛学群長　久保田空将補から、「学生と教官が真剣にゼミで議論した成果をまとめ、発表するという学術・教育の両面で有意義な発表会になりました。また、日本人学生だけでなく留学生も真剣に取り組んでくれました。本発表会に参加いただいた同窓会各理事をはじめ平素からの同窓会のご支援に感謝しています。引き続きご支援をお願いします。」と同窓会に対しても謝意がありました。

（３０期陸　山坂泰明　記）

陸上要員の発表

海上要員の発表

航空要員の発表

優秀者（陸上要員）

優秀者（海上要員）

優秀者（航空要員）

佐藤理事による講評・激励

学校長と各理事との懇談

◇令和４年度断郊競技会激励

令和 5 年 3 月 8 日（水）陽春の中、令和 4 年度断郊競技会が行われ、磯部同窓会副会長が激励に訪れました。

近年、新型コロナ感染予防のため校内コースのみで行われていましたが、今年度は 3 年ぶりに校外コースを取り入れ、観音崎灯台をスタートにゴールの陸上競技場まで約 7㎞ のコースを約 10㎏ の背嚢を背負った 8 名から 9 からなる各分隊が気合も高らかに力走を繰り広げていました。

各分隊は、早い分隊で 36 分遅い分隊では 40 分以上かかるところもありましたが、女子学生のいる分隊では、途中で男子学生が背嚢を背負う光景も見られ、競技会を通じて　　同期間の団結心が脈々と培われていることを確認いたしました。

なお、閉会式は後日（10 日（金））に実施されるとのことでしたが、ゴール後の各学生の全力を出し切った若々しい姿に頼もしさを感じ、実りの多い競技会であったと感じました。

２　断郊競技会結果

（大隊対抗）

優　　勝：第４大隊（平均：44 分 53 秒）

準優勝：第３大隊（平均：45 分 24 秒）

（分隊対抗）

第１位：第４大隊第１分隊（36 分 00 秒）

第２位：第３大隊第１分隊（37 分 06 秒）

第３位：第２大隊第１分隊（37 分 34 秒）

久保学校長による号砲

磯部副会長の激励①

分隊の力走風景①

分隊の力走風景②

磯部副会長の激励②

磯部副会長の激励③

久保学校長との懇談

資料館見学

◆同窓会は今

◇第６６期生に聞く

「どんな生き方をしたいか」

陸上自衛隊幹部候補生学校　第３候補生隊第３区隊
一般幹部候補生　陸曹長　山田　圭花

現在、陸上自衛隊幹部候補生学校第１０３期一般幹部候補生課程に入校中の防衛大学校第６６期卒業生、機械システム工学科、硬式野球部、放送委員会の山田圭花です。

幹部候補生学校での生活が始まってから、早くも５ヶ月が経ちました。日々の生活にはすっかり慣れたものの、久留米の暑さと目まぐるしい日課時限や訓練をこなすのに精一杯な日々を送っています。

さて、去年のこの時期の私は、任官するかどうか、ずっと考えていました。悩んだ末に任官を選択しましたが、今となっては、悩んでよかった、任官してよかったと思っています。そこで今回はそう思うことができた理由について話したいと思います。

まず、悩んでよかったと思えたのは、考えて考え抜いた決断に自信を持てたことです。なぜ自衛官を志したのか、なぜ今は任官することに迷いがあるのか、どんな不安があって、それはどうしたら払拭できるのか、今やりたいと思っていることは今でないといけないのか、どんな生き方をしたいのか、今の私には何が足りていないのか。悩むというのは、自分のことを考え直すチャンスでもあると思っています。当時の私は、ワーキングホリデー※に挑戦し、実践的なコミュニケーション能力を向上させ、精神的なタフネスさや自発的な行動力を身につけて、自分の可能性や将来のキャリアを世界に広げたいという想いがありました。そこで、「自分ノート」と題した自問自答をするためのノートを作り、あらゆる問いに対して自分の思いを書き出して整理してみました。そのようにして考えた結果、ワーキングホリデーへの挑戦は必ずしも今

である必要はなく、幹部候補生学校が一体どんなところなのか自分の目で確かめてみたい、自分を試してみたいと思い、任官を決意しました。自分を深く見つめ直したことで目標がはっきりとし、幹部候補生学校入校への思いを確固たるものにすることができました。

続いて、任官してよかったと思えたのは、幹部候補生学校での生活を通して、日々成長していると実感できることです。幹部候補生学校での生活は防衛大学校よりはるかに忙しく、体力・気力とも限界に近い過酷な訓練や体力練成が絶え間なく続きますが、ここで行われる全てのことには一貫性があります。定期試験、野外訓練、高良山登山走、藤山武装障害走、３０・５０・１００キロの徒歩行進訓練などにより、常に目標が付与され、それを意識した生活や練成を行います。そのような訓練等においては、「幹部自衛官として必要な資質を涵養し、初級幹部としての基礎を確立する」という修学間の目的がはっきりしており、この共通認識が徹底されていることにより、効果の高い教育・訓練が実施できているのだと感じます。

防衛大学校での生活が長くなっていくにつれて、将来のこと、任官のことを考える時間が増え、そのことへの不安が募るのは当たり前です。しかし、防衛大学校での１年生の生活やカッター期間を経験しているのであれば、幹部候補生学校での生活のことはあまり心配する必要はありません。１０ヶ月という短い期間ではありますが、濃い毎日を通して非常に強固な同期の絆が生まれます。防衛大学校の同期だけでなく、一般大、曹士、薬剤師、体育学校出身の同期も共に生活するため、価値観や教養など新しい刺激を感じることが多くあります。そんな仲間たちと一緒ならどんなことでも乗り越えられるように感じます。長い人生の中での１年足らず、私はここでの生活を絶大な費用対効果のある試練の場だと思っています。自衛官としてはもちろん、人としても間違いなく成長できる場所です。忍耐なくして、成長はありません。また、もし不安を抱えていたり、悩んだりしているのであれば、それは自分を深く知るチャンスです。考えることから目を背けず、素直な自分の気持ちに耳を傾けてみてください。

最後に、防衛大学校では自分の時間を比較的確保しやすいので、「今」を全力で楽しんでください。みなさんの未来が充実した笑顔溢れるものであることを願っています。

※　ワーキングホリデー：二国・地域間の取決め等に基づき、各々が、相手国・地域の青少年に対し、休暇目的の入国及び滞在期間中における旅行・滞在資金を補うための付随的な就労を認める制度　（外務省ＨＰから引用）

「防衛大学校で得たもの」

陸上自衛隊幹部候補生学校　第４候補生隊第３区隊
一般幹部候補生　陸曹長　殿塚　崇央

私は現在、陸上自衛隊幹部候補生学校第１０３期一般幹部候補生ＢＵ課程に入校中の防衛大学校第６６期卒業生、国際関係学科、陸上競技部の殿塚崇央です。

私が幹部候補生学校に入校して早くも５ヶ月が経過しました。思えば、入校当初は、やらなければならないことや覚えることの多さに慣れず、本当に苦労しましたが、日々一生懸命過ごしてきたことで、幹部候補生学校での生活に徐々に慣れてきました。野外訓練をはじめとする各種訓練において、区隊指導部や教官から教えていただいたことを踏まえ、自ら考えて実践することにより、自分自身の成長を実感しつつあります。

入校以降、新たに加わったＵ課程の同期たちは非常に優秀であり、今まで想像もつかなかった多様な経験や考え方に触れることで、彼らからも多くの事を学んでいます。入校直後は私たちが支えてきたＵ課程の同期も、今では皆とても頼れる存在です。幹部候補生学校におけるすべての教育は段階的に行われており、それを一つ一つ着実にこなしていくことで、入校当初は到底達成できないと感じていた練度に到達できるようになるのではないかと考えています。今後、私たちは藤山武装障害走、５０ｋｍ徒歩行進訓練、総合訓練（１００ｋｍ徒歩行進に引き続く陣地攻撃）とまだまだ厳しい訓練が続きますが、日々の努力の積み重ねが不可能を可能にすることを信じ、頼れる同期たちと切磋琢磨しながら邁進していく所存です。

さて、私が防衛大学校４学年時にこの小原台だよりを読んでいた頃、私は幹部候補生学校での教育の全体像が見えず、期待と不安の入り混じった感情であったことをよく覚えています。幹部候補生学校での生活はどのようなものなのか、訓練はどれほど厳しいのか、そして私たちは防衛大学校で得たことが今後の自衛隊勤務にどう生かされていくのかなど、当時は様々なことについて悩んでいました。きっと、この寄稿文を読んでいる防大生たちも皆、同じ心境にあると考えています。幹部候補生学校での

生活、訓練内容等については後日説明があると思いますので、ここでは割愛させていただきます。今回は、私がこの幹部候補生学校で５か月間過ごした時点での経験から、防衛大学校での教育で得たもの、それが今後どのように生かされているのかについて焦点を当てて述べていきたいと思います。

まず、防衛大学校における４年間の教育を通じて何を得たのかについてです。この疑問については、現段階でも明確な答えが出ているわけではありません。しかし、幹部候補生学校で５ヵ月間過ごしてみて確かだと言えるのは、講義や学生舎運営の中で培われた科学的思考力、４年間の集団生活により身についた人間力、そして校友会活動、定期訓練、各種競技会等で鍛えた体力・気力は、防衛大学校を卒業してから現在に至るまでも確実に役立っているということです。幹部候補生学校では、１０ヶ月間という短い期間に初級幹部として職務を遂行する上で必要とされる多くの事を一気に学ぶため、とにかく時間がありません。さらに、野外訓練、課目試験、各種検定等で精神的・肉体的に追い込まれる機会が数多く存在します。そのような環境下において、最大限修得するためには、限られた時間でより効率的・効果的に遂行する的確な判断力・実行力、集団生活を送りつつ目的達成のため一致団結、かつお互いの人格を尊重できる人間力、そしてあらゆる困難を克服するための体力・気力が重要です。その資質・識能・人格の基礎を形成してくれたのが防衛大学校であり、４年間の教育の中で得たものと考えています。

２つ目の防衛大学校での教育が今後どのように生かされているのかについてですが、これは前述したとおり、幹部候補生学校での修学に大きく生かされています。そして、卒業後の自衛官勤務にも反映できると考えています。

様々なことに悩み、多くの困難に直面している学生がほとんどだと思いますが、それでも現役の防大生にアドバイスできることがあるとすれば、現在受けている教育や日々の学生舎生活、校友会活動、その他の活動を含めて今を真剣に取り組んでいけば、得られるものは確実にあります。日々目標を掲げ、その達成に向けて励むとともに、自信をもって一つ一つに向き合い、全力で取り組んでみてください。防衛大学校での学びは、間違いなく将来のための礎となります。それを信じて今を大切に過ごして下さい。私も幹部候補生学校での教育から少しでも多くの事を学び、将来の資となるように全力を尽くします。

最後になりますが、皆さんと部隊で一緒に勤務できることを楽しみにしています。

「後輩に伝えたいこと」

海上自衛隊幹部候補生学校
第７３期一般幹部候補生課程　第５分隊
一般幹部候補生　海曹長　日高　黎人

海上自衛隊幹部候補生学校　第７３期一般幹部候補生課程（Ⅰ課程）の日高候補生です。この度、防衛大学校６６期本科学生の卒業生を代表し、「小原台だより」に寄稿する機会を頂きましたので、「後輩に伝えたいこと」と題し、３点述べたいと思います。

一つ目は、組織の強さについてです。私が防衛大学校を卒業して海上自衛官の制服に袖を通し、早くも半年が過ぎようとしています。その中では、普段の教務及び実習のほか、短艇競技や突然に発動される総短艇競技、８マイル（約８時間半）遠泳、水泳競技、厳しい学生館生活等、様々な経験をしてきました。一般幹部候補生課程　第１学生隊（内訳：防大卒９８名、一般大卒８９名）は、突如始まった初対面の人との生活にも関わらず、濃密な候補生生活の中で、強固な絆を育んでいます。前述の様々な経験に加え、私は第１学生隊の学生長を拝命し、融和団結の中心となる機会を頂きました。入校当初は、新しい環境下で自分自身のことすらままならない中、さらに学生長という正解のない重責を担い、日々模索しながらの勤務でした。同期の範とならなければならないという理想と、自身の実情とのギャップに苦しむ日々でした。そうした中で、私の精神的支柱となったのは、同期の存在です。苦しい状況でも、自分を犠牲にして支えてくれる同期の助けがあったからこそ、乗り越えることが出来ました。いかに困難な課題でも、全員で協力すれば達成することができることを思い知り、組織力の重要性を痛感しました。

二つ目は、責任と自覚についてです。「幹部候補生たる海曹長」という言葉は、肩の金線の重みを端的に言い表した言葉です。私は「我が国の平和と独立を守る」から始まる服務の宣誓をして任官したものの、当時そういった覚悟があったかと問われると、分かりません。今年２月、ウクライナ侵攻において自国の平和と独立を守るため

に身を呈する若者達をリアルタイムで見て、「国防」という任務に対し、怖いという感情さえ抱きました。しかし、本校の練習船実習は、実際に自分の指示で船を動かし、命を預かるという責任の重さを学ぶことで、自分の職責を自覚するきっかけとなりました。操船する海域は、複数の船舶が輻輳するため、周囲の地形や気象等を踏まえて安全に操船しなければなりません。航海指揮官として一人でジャイロレピーターの前に立つのは、想像以上に緊張しました。自身の操船によって、重大な事故を招きかねないということを強く認識したためです。幹部自衛官の職責は重く、自身の指示によって人の命を左右します。航海指揮官として練習船に乗っている人の命を預かっているのと同様に、幹部自衛官となり、部隊を指揮して国防を担うということは、国民の命を預かることと同義であると考えます。今は直接国防に関与していませんが、「幹部候補生たる海曹長」の職責を自覚し、日々邁進していく所存です。

三つ目は、実力の醸成についてです。本校での生活は多忙を極めるため、日々の生活に忙殺され、目の前の課題に取り組むだけになってしまう可能性があります。また、時間に余裕があるときに、自分のしたいことを抑え、実力を高める努力をするのも難しいことです。私自身も防大生の頃、時間に余裕がありながらも努力を重ねられていませんでした。

「部下は困ったときほど幹部を見るものである。」

これは、本校の学生隊長が総短艇競技の講評を述べられた際の一節です。部隊の意思決定を担う幹部自衛官は、そういった状況にも対応しなければなりません。私の場合は、第１学生隊として想定外の状況になった際に、「学生長はどのような判断をするのか」と注目された経験があります。この状況は、今後の幹部自衛官生活において、誰もが必ず経験することです。そういった状況に即応するためには、まず前提となる知識や技能といった実力が必要です。幹部候補生学校で身に付けることができる実力は、今後、幹部自衛官としての根底をなすことから、着実に身に付けなければなりません。目の前のことに没頭しすぎるのではなく、先を見通して実力を醸成することが重要です。

以上、「後輩に伝えたいこと」と題して述べましたが、私自身まだまだ未熟であり、「はっ」と気付かされることが多くあります。後輩の皆の目標となれるよう、立派な幹部自衛官に少しでも近づけるよう、引き続き精進していきます。後輩の皆が、勇気を出してこの世界に飛び込んでくれることを期待しています。

記事内写真　タイトル「江田島の桜の下に集う同期」

「ＢＵ一体化における防大出身者の真価」

航空自衛隊幹部候補生学校
学生隊第２中隊第１区隊
一般幹部候補生　空曹長　城野　勝功

１　はじめに

はじめまして。本年４月、航空自衛隊幹部候補生学校（以下「幹候校」という。）に入校した城野曹長です。私が現在所属している幹候校は、従来別々であった防衛大学校（以下「防大」という。）出身者と一般大出身者の課程教育が、令和４年度から一体化されました。この課程は、防大出身者を表すＢ課程と一般大出身者を表すＵ課程が一体化したことから、ＢＵ課程と呼称され、課程期間が約９か月となっています。

本課程を履修している中で、私自身防大出身者の真価について考えるようになりました。そのため、本稿では、私が防大出身者の真価について考えるようになった経緯に触れつつ、私の考える防大出身者の真価及び幹候校でその真価をどう発揮すべきかについて述べたいと思います。

２　防大出身者の真価を考察するに至った経緯

本年度のＢＵ課程のカリキュラムでは、防大出身者と一般大出身者が同じ空間で同じ内容の教育を受けています。その中で我々防大出身者は、ここ幹候校で何を学び、どのような存在となることが求められているのか、そして防大出身者の真価とは何なのだろうかという問いが生じてきました。

３　防大出身者の真価に関する考察

私はよく、防大では４年間をかけて人格形成を主体とした教育を行うと耳にしてきました。私自身の防大生活を振り返ると、学生間指導や学年ごとの役割を考えた自主自律、同期や先輩後輩との関わりにおいて多くを悩み、人間関係の難しさを学びました。それを活かし、幹候校においても防大出身者の多くが、入校当初から多くの場面においてリーダーシップを発揮し、一般大出身者を牽引しています。

読者のみなさんの中には、防大出身者は防衛学の履修及び各種訓練による知識技能があるから一般大出身者をリードできるのだと考える方もいるかもしれません。しか

しながら、知識は幹候校における課程教育を通して修得することができるものであり、防大出身者が知識の豊富さで一般大出身者を凌駕し続けることは不可能です。実際に、課程履修の半ばに差し掛かった今、実際に防大出身者と一般大出身者の基礎的な軍事知識の差は薄れてきています。では、一体何が防大出身者を防大出身者たらしめるのか。それはやはり、防大で培われた良き人格、人としての魅力ではないかと思います。そして、その人の魅力によって多くの場面で強いリーダーシップを発揮できているのだと思います。したがって、防大出身者の真価は人としての魅力であると言えます。

４　防大出身者としての真価を発揮するために

防大出身者の真価、いわゆる人としての魅力は、防大出身者が共通して保持しているであろう、ノリの良さや同期意識の強さに限定するものではありません。私の考える人としての魅力は、自身の長所、個性を軸とした様々な魅力のことです。幹候校においてそれを発揮するためには、一般大出身者をはじめとする出身ソースの異なる学生との関わりを通して、防大で培った自身の長所や魅力を再認識し、進化させることが必要であると思います。この進化には、自身の長所や魅力を課程期間の訓練のみならず、様々な活動において発揮し、成功する経験が必要です。この成功体験を通じて、自信をもたらし、人格の更なる練磨と深化へと繋がり、ひいては防大出身者としての真価の発揮に資するものと確信しております。

５　おわりに

幹候校における全ての教育や業務に愚直に取り組み、その上で、自身の人としての魅力をもって本気で多くの人とぶつかること、特に防大出身者と違うバックグラウンドを持った一般大出身者と関わることで、自身の人としての魅力をさらに輝かせることができると思います。これこそが、幹候校で真に学ぶべきことではないでしょうか。

私自身も、課程履修残り約３か月、ここに述べた人としての魅力を高めるべく、課程履修に愚直に邁進していく所存です。同期学生はもちろん、今後入校する後輩の皆さんも、あらゆることに愚直に取り組み、自身の強みを認識して防大出身者の真価を発揮してほしいと思います。防大出身者としての真価を発揮することで、幹候校においてＢＵ課程を盛り上げ、ひいては将来の航空自衛隊の精強化に貢献する所存です。

徒歩行進訓練において中隊長として指揮を執る様子（筆者：写真中央）

◇今人生、真っ盛り（２８期生）

「目指すはお達者クラブ！」

田浦　正人（２８期　陸上）

「うちの部屋から選挙で決める役職に就くものを出すぞ！」

約４０年前、第３４３小隊３１２号室の寝室で二見室長が突然言い出しました。

ご案内のように、勤務学生は学校側が決めますが、選挙で決める期生会長、校友会委員長、綱領委員長などは、その気になればなる事ができ、その仕事に就くことによっていろんな経験を積むことができます。

その結果、成長することができるというお話でした。

第１学年田浦学生は、「室長、とんでもないことを言い出したな。卓球部と学生舎生活で、ただでさえ忙しいのにそんな余裕はないよ。」と思っていました。

しかし、第２学年になって、期生会長の選挙の際、第４大隊の同期に祭り上げられ立候補することとなりました。

当時、第４大隊から学生隊学生長は出ないだろうから、選挙モノは第４大隊が取るぞと盛り上がり、立候補者のいない大隊を抱き込んで選挙に臨んだのを覚えています。

この作戦が功を奏し当選は果たしましたが、祭り上げられただけで、確固たる信念もないままに当選してしまいました。

室長が言ったから期生会長なったわけではありませんが、頭のどこかに残っていたのでしょう。

後に、同部屋だった間瀬君が、校友会委員長になったのも室長の言葉の影響があったと思います。

「三つ子の魂百まで」ではありませんが、室長の偉大さと寝室の夜話効果だと言っても過言でありません。

祭り上げられた関係上、一生懸命務め上げ、それなりに成長させていただきました。
第３学年の時、卓球部で主将になる事だし、そろそろ期生会長を下番しようと考えましたが、立候補する者が誰も居らず、「田浦でいいんじゃない！」との前向きとはいえない雰囲気のまま期生会長を続け、卒業することになりました。
絶大なる信頼を得ていたわけでもなく、他に誰もいないからとの理由で期生会長を続ける事となりましたが、卒業後は、「言い出しっぺ」役を自任し、卒業１０周年や２０周年など、定期的に同期生が集まる機会を提供する事と同期のご不幸の際には供花をお出しする事を最低限の任務と定めて活動してきました。
お陰様で、周年記念の同期生会は、その時々の東京勤務者の助けを借りてこれまで何度となく開催することができました。
また、残念ながら志半ばにしてこの世を後にした同期には、「防衛大学校第２８期同期生一同」との名でお花をお供えさせていただきました。
ご遺族や参列された方々からは、感謝のお言葉をいただいています。
令和４年の春、山村海上幕僚長の勇退を最後に、再任用の同期は残っていますが、２８期はいわゆる現役を全員が終えました。
「任重く、道遠し」と言いますが、志半ばでこの世を後にした者、任官しなかった者、途中で退職した者も含め、まさに同期約４００名全員で国防の任を全うできたのだと思います。
勿論、殉職された同期もいますが、幸いなのは、一人の戦死者も出すことなく、国防の任を全うできたことです。
この大きな区切りとなる令和４年度に同期全員での任務達成を祝い、全国規模の同期生会を計画しています。
同期全員の還暦祝いを趣旨として同期生会を企画しましたが、コロナもこれあり、延び延びとなっていましたが、そろそろ同期生会をやろうとの機運が盛り上がってきましたので、決行する運びとなりました。
これまでの周年記念の同期生会では、現役の者、民間の者も含めて「同期みんなで国防の任にあたろう！」と盛り上がっていました。
これからは、「目指すはお達者クラブ！」の掛け声のもと「同期と呑むお酒は美味しいねぇ！」と盛り上がりたいと考えています。
現役時代は、仕事の事が話題の中心になる事が多かったと記憶していますが、最近は、孫の話、不健康自慢？に変化してきていると思います。
それはそれで、良いと思っています。
だから「お達者クラブ」なのです。
同期で集まれば、一瞬にして約４０年前にワープすることができます。

このかけがえのない同期の集まる機会をできるだけ長く、また多く設けることが、私の「今人生、真っ盛り」なのかもしれません。

そして、最後の一人になるまで、同期生会費が続く限り、「防衛大学校第２８期同期生一同」のお花をお供えしていきたいと考えています。

令和５年３月１５日グランドヒル市ヶ谷において、「目指すはお達者クラブ！」と大声で乾杯できることを夢見ている今日この頃です。

「身の丈の恩返し」

及川　正美（２８期　陸上）

2022 年 2 月から、東西線早稲田駅近くに同期と共同で「（非公式）小原台サロン」という防大 OB を中心とした世代間交流の場を運営しています。オープンから半年余り経過しましたが、4 期の冨澤元陸上幕僚長や 5 期の杉之尾先生をはじめ多くの先輩・同期・後輩が集う場所となっています。陸海空民間関係なく集まる同期や、特に 50 期台 60 期台の後輩たちが頻繁に来るうえ、オーストラリア大使館や米豪軍関係者、外資系金融機関を中心とした防大・自衛隊が大好きな人たちも集まり、様々な繋がりに発展しています。

私にとって防大時代は「人生最悪の 4 年間」「記憶から消し去りたい黒歴史」であり、苦しく辛いことばかりで正直なところ良い思い出は一つもありません。しかし幹部自衛官になるのだと耐え忍び、何とか卒業して任官しました。希望通りの会計職種になり、意気揚々と北部方面会計隊本部に着任したところまでは良かったものの、BOC を終わって着任した美幌会計隊で上司と折り合いが悪く、防大卒業から 3 年、25 歳 3 等陸尉で退職しました。それから 25 年以上、50 歳を越えるまで、防大・自衛隊はもちろん、たった一人を除き同期とすら縁を切ってきました。

東日本大震災の発災からちょうど 1 週間後、顧客からの切なる依頼を受け、関越道新潟～山形県小国町～笹谷トンネル経由で大雪のなか夜通し走り、2011 年 3 月 18 日未明にゴーストタウンのように人の気配の消えた、凍り付いている仙台に到着しました。午前中に仕事を終わらせ塩釜の実家に食料や 200L 以上の水を届けたところ、父が「多賀城まで津波が来たぞ。見に行くか。」と言うので行ったのが人生の大きな転機となりました。実家は高台にあるので山側から多賀城市内に進入したところ、砂押川を渡ってすぐにここまで津波が来たというラインがはっきり残っていて、その先 10m ほど行くととんでもない光景に遭遇しました。テレビで何度も映像は見ていたものの、臭いや雰囲気はわかりませんでした。見慣れた風景は、悉く破壊されていました。諸行無常という言葉が過りました。そして気持ちが悪くなって帰宅する車内で、ふと四半世紀も会ってなかった何人かの同期の顔が浮かんだのです。「もう長い間会ってないけど元気かな。あと数年したら定年になって、みんな故郷に帰ってしまうの

かな。生きてるうちに一度でいいから会いたいな。」

それから1年ほどして、二人の同期との再会が契機となり立て続けに同期と会うようになりました。突然現れた私を訝しがる同期は何人もいました。しかし「ただ会いたいだけ」だった私は、ひたすら会い続けました。2013年春、26期で学研HD社長の宮原さんとたまたまお会いすることがあり、それがきっかけで小原台クラブに入会しました。その1年半後に事務局長を安請け合いしてしまったのが更に大きな転機となり、2016年6月には（公財）防衛大学校学術・教育振興会理事を拝命しました。これらがベースとなって、1期の大先輩から現役防大生まで繋がることとなりました。

小原台クラブに入会した頃、監査役の方から寿司屋に連れていかれた際、払おうとしたら「払わなくていい。後輩にやってやれ。」と言われ、防大に後輩に奢るという文化があったことを思い出したのです。ちょうど57期と知り合う機会があったので何度か奢っていたものの、大変な出費になってしまいました。そこで早稲田にあった事務所に後輩を呼んで4人くらいの飲み会をするようになり、そのうち後輩が飲んで泊まるのも常態化していきました。ちょうど新型コロナが流行り始めたころ東向島に移転することになったのですが、外出が制限され居酒屋が休止するなか事務所に出入りするメンバーが大きく変わりました。そのうち事業も低調になり都内事務所を撤退しようとしたところ、よく来ていた同期が「資金協力するからこういう場を続けよう」と言ってくれて、再度早稲田に移転することになったのです。

同期の支援が無ければ、サロンは実現しませんでした。彼は「貴方を支えるのは「身の丈の恩返し」だ」と言います。今でこそ毎回10名前後が集まり好評を博していますが、私自身は以前からずっと何の意図も目的もなく、ただ「みんなが喜んでくれるのを見ているのが楽しい」からやっているだけです。私が目指すのは「そこにいるけど、そこにいない人」「無色透明な人」です。気が付くと還暦を過ぎ、人生の決算期に差し掛かろうとしています。過去その時その時でベストを尽くしたつもりでいましたが、振り返ると大したことをしてなかったと思うこともしばしばです。しかし、何も考えず心を空にしてサロンで多くの人と交流している今が、人生で一番楽しく充実している気がします。将来の国防のため日本のために、諸先輩や同期・後輩の経験・ノウハウを若い後輩たちに伝える一助になれば、防大・自衛隊に少し恩返しできたかなと思う次第です。

防大 OB を中心として、元幕僚長、元防大教授、元米海軍大佐、豪大使館参事官や駐日豪駐在武官、一橋大博士課程の女子など　サロンの参加者は幅広い

「返事は常に、はい！か、Ｙｅｓ！か、喜んで！」

相澤　輝昭（２８期　海上）

２８期海上の相澤輝昭でございます。２０１６年に防研戦史研究センター安保政策史研究室で退官後、巡り巡って２０２０年から防大防衛学教育学群統率・戦史教育室准教授を勤めています。今般、「小原台だより」への投稿依頼を頂き、「何で私に？」と問い合わせたところ「退官後の波乱万丈が面白そうだったから」との事で、ならば文字通り「今人生、真っ盛り」の現職隊員（防衛教官）として、ここに至る紆余曲折と現況など、決して「盛った」話ではなくファクトベースで御紹介したいと思います。

私の現役時代は特技である掃海、潜水関連配置が主でしたが、３０代半ばに大学院研修（国際政治修士）機会を頂き、外務省出向なども経験していたことから、勤務の傍ら安全保障関連の研究にも取り組んでおり、いずれ研究職に就き、願わくは退官後も再任用でその職務を継続したいと希望しておりました。最終配置の防研で念願が叶い、ここでは要人の口述記録を作成し歴史資料とするオーラル・ヒストリーを担当しましたが、それを通じて私は安保政策史、自衛隊史関連の史資料の現況に問題意識を持つようになりました。

それはこの分野においては「一次史料が公開されない場合が多いため、学術研究が困難」との指摘があり、まさにそれ故にオーラル・ヒストリーが必要とされている訳ですが、やはり本筋としては公文書管理法の下、所要の歴史公文書が然るべく評価選別され、的確に保存管理されて時機を得て公開されるよう制度及び運用の改善が必要ではないか？というものでした。その検討に資するべく国立公文書館「アーカイブズ研修Ⅲ（公文書館専門職員養成課程）」を受講し、これを修了（後に創設された同館の「認証アーキビスト」制度では第１期として認証）しましたが、ここで得られた知見はこの問題の解決に向けて非常に示唆的なものでした。

そして本件の改善には長い時間を要すると見込まれたため、再任用を一層強く希望するようになりましたが、残念ながらオーラル・ヒストリーや行政文書管理改善の必要性などについて海幕の御理解を頂くには至らず、敢え無く不採用となりました。

さて、ここからが本題の「波乱万丈物語」で就活のスタートとなる訳ですが、当時の海幕援護は「学術関係は自己開拓」という仕切りであり、我ながら「無謀な挑戦」とは思いつつ大学やシンクタンク、関係官公庁など少しでも引っ掛かりそうな公募に片端から志願しては死屍累々といった日々が続きました。そんな訳で防研での退官挨拶では「同情するなら職をくれ！」、挨拶状では「新たな人生航路は『霧中航行用意！』の今日この頃ですが・・」と述べた次第であります。

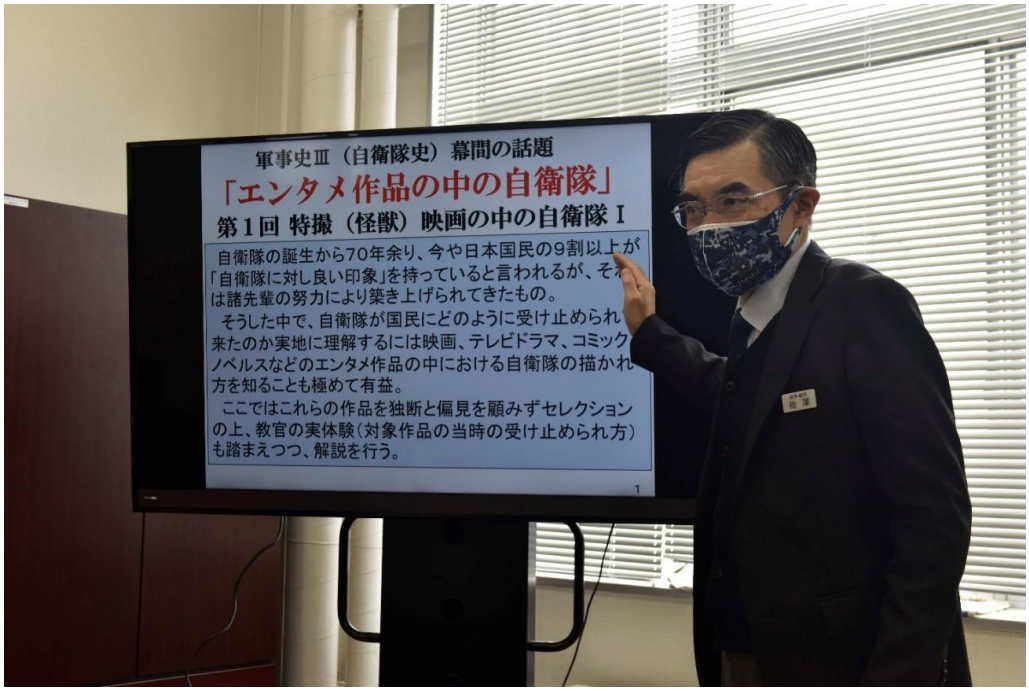
それでも「拾う神」は在るもので、もう諦めて一般的な仕事を探そうと考え始めたところで昔お世話になった外務省がアジア大洋州局地域政策課専門員（非常勤）として採用してくれました。ここでは歴史問題が主担当でしたが、経歴に鑑みて南シナ海関連の中ＡＳＥＡＮ関係なども所掌し、２０１６年７月の南シナ海仲裁裁判に際してはリアルタイムでの各国対応のモニターなど、非常に貴重な経験もさせて頂きました。

このように外務省での勤務は充実したものでしたが、ステップアップを期して笹川平和財団海洋政策研究所（ＳＰＦ／ＯＰＲＩ）の研究員に応募したところ、実はこちらは一度蹴られているのですが、今度は外務省での業績を評価して頂けたようで幸いに採用となりました。ここでは海洋安全保障を担当し、研究者として大変充実した勤務となりました。

そんな中で自身の研究成果としては外務省勤務当時から注目していた「自由で開かれたインド太平洋戦略（ＦＯＩＰ）」をテーマに「外務省ＨＰから読み解く・・」と題する解説を発表したところ、これが思いのほか評判が良く、何本かの論文中で引用をして頂けたほか、海外からも問い合わせを頂くなど、ささやかながら私にとっての「出世作」となり、以来、私はウケ狙いと本件フロントランナーの一人という自負を込めて「自由で開かれたインド太平洋芸人」を自称している次第であります。

そうしてＯＰＲＩでの勤務が２年を経過した頃、防大で「自衛隊史」と日本語研修生に対する教育を担当する教員の公募があることを知り、これに応募することとしました。元より母校での教育研究をという強い希望はありましたが、それに加えて前述の防衛省・自衛隊における行政文書管理改善への再チャレンジという思惑もあり「敢えての挑戦」をと考えた次第です。幸い面接まで進むことができ、そこで自己ＰＲとして述べたのが副題とした「返事は常に、はい！か、Ｙｅｓ！か、喜んで！」でした。この言葉は揶揄的に使われる場合もありますが、私自身は現役時代からこれを「仕事の流儀」としており、今にして思えば上記で縷々述べて来た退官後の「波乱万丈」も、結果的にはそのチャレンジ精神が功を奏したものと考えています。

そして念願叶って防大教員として採用された現在、その言葉に違わぬよう、統率・戦史教育室准教授としての本務は元より国際交流センター、グローバル・セキュリティーセンターの兼務、校友会ヨット部部長としての職務、また、教官研究として進めている行政文書管理改善の取り組みや各種の対外発信などなど、手を広げ過ぎて少々オーバーフローの感もあり、時には「Ｎｏ！か、いいえ！か、ふざけんな！」に宗旨替えを、と考えることもないではありませんが、やはり基本的にはあらゆる職務に対して前向きに取り組んでいこうと思いを新たにする今日この頃でございます。



監修協力したＭＡＭＯＲ２０２２年７月号「防大准教授が説くエンタメ作品で描かれた自衛隊変遷史概論」に提供した筆者の講義風景写真

「これからも楽しく」

山田　真史（２８期　航空）

今回の寄稿依頼を受けてまず思ったのは、防大学生時代に何を考え、何をしていたのか？を想い出すことでした。入校動機はパイロットしかもヘリコプターのパイロットになりたいという漠然としたもので、入校後はいつ辞めようかと考えながら過ごした学生生活でした。勉学も交友会活動も中庸、訓練だけは真面目に取り組んでいたのを想い出します。

しかし、防大の学生生活は大変貴重な 4 年間となりました。頼りになる同期と知り合い、切磋琢磨しながら 35 年間の自衛官勤務を無事終えることができたと感謝しています。

3 年前に航空自衛官の制服を脱ぎ、現在の航空会社に職を頂いています。

入社直後にコロナ禍に襲われ、航空会社は大きな危機を迎えました。

それでも、中国武漢に取り残された邦人を帰国させる為のチャーター機の運航、年度末に東北地方を襲った地震の影響で鉄道が麻痺した際に上京が困難になった人々を移動させる為の臨時便の運航など、経費的に苦しい中にあっても「社会への貢献」を忘れない会社経営に接し、民間会社であっても「国家の一員」との意識の高さに感銘を受けました。

好きな飛行機と天気の良い日は富士山を眺めつつ、自分の経験や知見を活かし、時には伸展させる機会を模索しながら毎日を過ごしています。

さて、退官後に大きな出来事が起きました。今年の年初から、長女がブルーベリー農園の園主をやる事になり、2 年間放置されていた農園（約 2 反、２０a）の手入れから始めるという途方もない娘の冒険に付き合うことになりました。会社の休みに、もちろん無償です。何せ戦力は娘と妻と私の 3 人きり。草刈り機を扱った経験があるのは私だけという、何とも頼りない編成です。毎週末、日の出とともに（偶には寝坊することも）3 人で畑に繰り出し、日没まで剪定、雑草取り、害虫駆除や防鳥ネットの補修などに汗を流しています。

冬の枝剪定の時期には妻手製のおにぎりを冬日差しの中で頂き、春先には花を付けた樹の下で草取りをしながら、せっせと受粉をやってくれるミツバチの羽音を聴いていると日頃の喧騒を忘れさせてくれます。

夏の収穫期は無事に実った果実を摘み取りに来る子供たちの歓声や笑顔に癒されます。時には、枝に居座る蜘蛛に驚く人に対して「害虫を取ってくれる有用な友達」と説明することもあります。殆ど地元の来客の方々で何度も来園する人達との近所付き合いも始まっています。

自然の美しさや逞しさに触れる。農家の人達からお裾分けを頂き世間話に花を咲かせる。充実した自衛官生活を大きな達成感と共に退官し、次の目標に悩むのだろうと思っていましたが、続きがしっかりと用意されていた様です。

「人生、まだまだ楽しめる事が沢山あるじゃないか！」を実感している昨今です。

◆活動報告

◇令和４年度防衛大学校同窓会代議員会（実施報告）

同窓会は令和5年2月23日（木）祝日、令和4年度代議員会を完全Web方式により実施させて頂きました。以下、議決結果等について報告します。

１　令和4年度代議員会開催の経緯と概況

（１）開催経緯

今年度、会費の低納入率の継続により、年度計画に基づき下半期事業の実施要領を変更し、完全Web方式により代議員会を実施しました。

（２）代議員の出欠状況

代議員267名、出席者221名（82.8%）、出席者内訳：参加者76名、委任状145名

２　代議員会議決結果

代議員会で審議予定であった下記３つの議決事項について議決を行った結果、過半数の賛成を賜り、それぞれの議案についてご承認いただきました。

第１号議案　　令和3年度同窓会事業報告・会計決算報告・会計監査報告

第２号議案　　令和5年度同窓会事業計画（案）・事業予算（案）

第３号議案　　令和5年度同窓会役員の選出

３　議決内容の概要

（１）第１号議案

ア　令和３年度同窓会事業報告

同窓会は、「母校の充実・発展への寄与、会員相互の親睦・交流、社会活動への寄与を重視して着実に事業を推進する。」を方針として同窓会事業の実施、同窓会業務の運営を行った。

新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態措置・まん延防止等重点措置を受け防衛大学校の諸行事が変更・中止されるとともに、部外者立ち入り制限も継続されたため、同窓会の一部事業は中止・延期を余儀なくされたが、防衛大学校の校務運営に最大限寄与することを基本に、逐次事業内容を見直しつつ、事業を行った。

イ　令和３年度同窓会会計決算報告

予算　収入　20,680,000円、支出　25,000,000円

決算　収入　13,116,020円、支出　15,632,242円

資産からの繰入れ額　2,516,222円

ウ　令和３年度同窓会会計監査報告

令和 4 年 6 月 9 日に 4 名の会計監事による会計監査を実施し、決算につき正確かつ適法であることを確認

（２）第２号議案

ア　令和５年度同窓会事業計画

（ア）事業計画の方針

同窓会は、母校の充実・発展に積極的に寄与するとともに、会員相互の親睦・交流、社会活動への寄与等の事業を推進してまいります。この際、期生会・地域支部（海外支部含む）等と連携した会務運営基盤の充実とＷｅｂ会議システム等の活用による業務の一層の効率化に留意いたします。

（イ）母校の充実・発展への寄与事業実施の考え方

学校との意思の疎通を図りつつ、学校行事に参加するとともに、学校からの要望には柔軟に対応し、学生の修学・研鑽意欲の高揚及び期生会活動の充実等に資する支援、地域支部等による学生の部隊実習激励等を積極的に行い、母校の充実・発展に寄与してまいります。

尚、地域支部等による学生の部隊実習激励につきましては、今後、防大の部隊実習計画が具体化されしだい、各支部と調整させて頂きますのでよろしくお願いいたします。

（ウ）会員相互の親睦・交流事業実施の考え方

会員に同窓会活動の状況を積極的に発信するとともに、ホームページやＷｅｂ会議システム等を活用して期生会・地域支部（海外支部含む）等との緊密な連携を図りつつ各種事業を実施し、会員相互の絆の強化及び期生会・地域支部等の活性化に寄与してまいります。

この際、地域支部等を含めた各種競技大会には規則に基づき物的支援等を行います。

また、会員相互の親睦・交流事業のうち、各種競技会につきましては下記の通り計画しております。

○　囲碁大会　　9 月
○　ゴルフ・レギュラー大会　9 月
○　ゴルフ・シニア大会　　9 月
○　テニス大会　　5 月

（エ）社会活動への寄与事業実施の考え方

全国防衛協会連合会主催の「防衛大学校教授による安全保障講座」を協賛し、安全保障に係る知見敷衍・意識高揚に寄与してまいります。また、ホー

ムページに掲載する同窓会人材バンクの整備、周知、人材紹介等及び地域支部等が実施する社会貢献活動等の支援を通じて社会活動へ寄与します。

（オ）会務運営基盤の充実事業実施の考え方

同窓会の基盤となる期生会及び地域支部（海外支部含む）等との連携を強化して会員の状況把握と各組織の充実・発展を図るとともに、会員の会費納入促進、新たな会費納入制度の導入、寄付受けの拡大及び会議システム等の更なる活用により会務運営基盤の充実を図ってまいります。また、防衛大学校国際交流センターと連携して海外支部の現況把握のための態勢構築に努めます。代議員会等については、会費の低納入率の継続に鑑み経費節減のためＷｅｂ会議システムにより実施いたします。

イ　令和５年度同窓会予算

予算額　19,259,000 円(資産からの繰入れ額　8,403,000 円)

（３）令和５年度同窓会役員

会長　村川　豊（海 25）、副会長　小林　茂（陸 27）・佐藤　誠（海 26）・丸茂吉成（空 27）、理事　上尾秀樹（陸 29・事務局長兼務）・中西正人（海 27）、山田真史（空 28）、板宮敬悦（防大・陸 29）、会計監事　増田潤一（陸 26）・星指　隆（陸 27）・小島昌二（海 26）・池畠暢也（空 26）

４　同窓会からの報告事項

（１）令和４年度同窓会事業の実施状況

同窓会は、「母校の充実・発展に積極的に寄与するとともに、会員相互の親睦・交流、社会活動への寄与を重視して着実に事業を推進する」を方針として同窓会事業の実施、同窓会業務の運営を行っています。

現在、「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」の変更により防衛大学校の諸行事への部外者立ち入り制限等が段階的に緩和されたことを踏まえて、各事業等を推進中ですが、残念ながら、8 期生・9 期生が多大な努力により準備された入校式時のホームカミングディ２は学校の要請により中止となりました。

一方で、防衛大学校が開校祭時に防大 70 周年記念事業の一環として実施した「國分前学校長像（レリーフ）」設置式典に当該像を寄贈して母校の記念行事を支援しました。

（２）同窓会費の納入促進施策について

ア　各期生会長等への依頼

代議員会において同窓会費低納入期の各期生会長に会費納入を依頼しました。

(参考)納入率85%以下の期生会：33期、38期、44期、45期、46期、52期、59期、62期、63期、64期、65期、66期

イ　現行制度と併用した新たな会費納入制度について

細部は、同窓会ＨＰの「同窓会費に関すること」バナーをクリックし、「同窓会費に関するご案内」をご覧ください。

（３）各種競技大会支援要領の変更について

県単位以上の支部が主催するスポーツ行事において、「防衛大学校同窓会」を銘記した優勝カップに加えて上位入賞者への賞品も支援対象に含めることとしました。細部は、「防衛大学校同窓会における地域支部等に対する支援に関する細則」をご覧ください。

５　同窓会本部からのお知らせ

（１）令和5年度代議員会等の予定

令和5年度の代議員会の開催時期につきましては、令和6年2から3月で検討中です。決定次第ＨＰ等で連絡させていただきます。

（２）ホームビジットデー（HVD）、ホームカミングデー（HCD、HCD2）の予定

ア　同窓会事業である46期生のHVDの令和5年度開校祭に併せての実施について、今後、学校側と調整します。

イ　学校行事である23期生HCDは、令和5年度卒業式に併せての実施について、今後、学校側と調整します。また、HCD2は、10期・11期生が令和5年度入校式に併せて実施する予定です。12期生HCD2は、令和6年度入校式に併せての実施について、学校側と調整します。

（終わりに）

令和5年度の防大同窓会事業が計画通り実施できますよう、重ねてご支援・ご協力をお願い申し上げますとともに、同窓会員の皆様が益々ご健勝で過ごされますことを心より祈念しております。

（同窓会総務部　平栗　浩一（陸29））

◇第４５期生ホーム・ビジット・デー（ＨＶＤ）

令和 4 年 11 月 12 日(土)、爽やかな晴天の下、ホーム・ビジット・デーの行事として、 本科第 45 期生を代表して期生会長　青山佳史 1 等陸佐（統合幕僚監部　訓練班長）以下 3 名が久保学校長を表敬訪問するとともに、3 号学生舎等に記念品として姿見を寄贈し、その後、顕彰室参拝を行いました。

ホーム・ビジット・デーは防大卒業生が卒業 20 周年目の防大開校祭に家族を含めて参加させていただく機会であり、令和 2 年の春頃から始まったコロナ禍の影響により延期を挟みましたが、昨年度に続き同窓会や学校関係者のお計らいにより実施する運びとなりました。45 期生は期生会長を中心に準備を進め、昼食会、学校長表敬、記念品贈呈、顕彰室参拝等の行事を執り行い、同期の絆を再確認するとともに、同窓会長からの激励の言葉（同窓会事務局 HVD 担当者代読）を頂き、今後の活躍を誓うことができました。

45 期生は当初、横須賀ベース近傍の「カレー本舗 ベイサイドキッチン」に集まり、同期生約 70 名で記念撮影を行い、その後店内で期生会長からの挨拶を皮切りに、会食しながら旧交を温めました。

その後、期生会長以下 3 名が小原台に先行し、久保学校長への表敬訪問を行いました。学校長から防大の卒業生が国防の中核として活躍していることを頼もしく思うとのお言葉をいただくとともに、我が国を取り巻く安全保障環境は引き続き変動の時期にあり、激しい変化にも対応できるような人材の育成に取り組む意欲をお示しいただきました。期生会長以下代表者たちも、さまざまな変化に的確に対応し、我が国の安全を保つために最大限の努力をすることを誓いました。

45 期生会長(右から 2 人目)以下代表者による学校長表敬

記念品として、姿見が 2 枚贈呈され、3 号及び 4 号学生舎の 3 階から 4 階踊り場に設置されました。

寄贈された姿見（3 号及び 4 号学生舎の 3~4 階踊り場に設置）

学校長表敬後、45 期生は顕彰室前に集まり、同期生 4 名も祀られる顕彰碑の前で参拝を行いました。防大学生課の御厚意により、翌日の顕彰碑献花式のため準備していた顕彰室前の会場を借用して参拝の要領について説明を行い、2 組に分かれて顕彰碑参拝を実施、その後期生会長が改めて顕彰室前で同期生に期生会の活動状況等を説明し、同期の結束と今後の活躍を呼びかけました。

顕彰室での慰霊参拝

顕彰室前での期生会長による説明

45 期生にとって、卒業後約 20 年ぶりに母校に集まったこの日が誓いを新たにする記念すべき日になったことと思います。

昼食会受付

期生会長挨拶

昼食会場前での 45 期生記念撮影（ベース近傍「カレー本舗ベイサイドキッチン」）
（文責 同窓会事務局 HVD 担当者・第 45 期生会長）

◇第８期・第９期ホーム・カミング・デー２（ＨＣＤ２）

令和 4 年度のホーム・カミング・デー2（HCD2）は、コロナ禍のために中止となりました。

平成 31 年度は、7 期生が招待されました。令和 2 年度は 8 期生が招待されるはずでしたが、新型コロナ感染症の拡大に伴い延期となり、翌年度の令和 3 年度は新たに 9 期生会も加わりましたが延期、令和 4 年度は、改めて 8 期生と 9 期生が合同で招待される予定でありましたが、コロナ禍のため中止となりました。

これまで準備を行ってこられた防衛大学校職員の皆様、そして、招待予定の 8 期生及び 9 期生の皆様方は本当に残念であったことと思います。

令和 3 年 7 月、新型コロナ感染症はまだまだ猛威を振るっていましたが、期生会と防大関係者の顔合わせのミーティングが行われ、以後、両期生会の方々は実施に向けて精力的に計画を練ってこられました。

準備に関しては、行動予定等の単なる実施要領に留まらず、宿泊施設、交通機関の紹介等、ロジ関連についても細部にわたる緻密な資料を準備されていました。

特にコロナ禍での実施、そして 2 期合同での実施という事で、準備、計画には非常に御苦労があったと思われますが、期生会の方々のそのパワフルな活動は目を見張るものであったと思います。

また、当時、行事等に対する政府の方針は、「5,000 人を上限とし、収容定員の 50%以内」となっていました。これを防大の記念講堂に当てはめると、1,000 人の収容人数となります。例年学生と父兄が合計で 1,000 名程度参加するので、この時点で人数制限に引っ掛かります。また、防衛学館でモニターにより式典を視聴する案もありましたが、これも教場の設備から制約がありました。つまり、新型コロナの状況次第では、HCD２招待者は、構内に入る事は出来ても、式典参列は叶わず、また、モニター視聴もできない可能性がありました。

このような厳しい状況で調整等を行わなくてはならない期生会の方々のご苦労は如何程だったのかと思いますが、皆様溌剌と準備をされていました。

更に、学校長主催の HCD2 は 2 期合同で実施されますが、各期生会別々で実施される懇親会もコロナ禍のため、難しい問題を含んでいました。密を避けるための食事方式、ホテル側の受け入れ可能人数、仮に懇親会が分散開催となった場合の招待者の参加要領についても防大側と綿密な調整が必要であり、コロナの状況に応ずる柔軟な対応が求められていました。

これらの問題は、おそらく最後の最後まで関係者の皆様の頭を悩ませる問題であったと思われますが、皆様前向きに準備を進めておられましたのが印象に残っています。

令和 5 年度は、10 期生・11 期生の合同招待という事で計画がなされています。

8 期生、9 期生の皆様におかれましては、これからもお健やかに過ごされんことをお祈り申し上げます。

令和3年7月のキックオフミーティング

（同窓会事務局事業部 HCD２担当　記）

◇第２２期生ホーム・カミング・デー（ＨＣＤ）

第 22 期生ホーム・カミング・デー（以下 HCD という。）が、令和 5 年 3 月 18・19 日の両日及び 3 月 26 日に、防衛大学校令和 4 年度卒業式典（本科 67 期生等）への学校長招待行事等として実施されました。コロナの影響のため、昨年の 22HCD は延期となっていました。今回の卒業式は日程が急遽変更されたため、22HCD 実行委員会では参加を予定していた会員と御遺族の旅程・宿泊予定等の変更とその負担等も勘案し、かつ卒業式への参列等 HCD の目的を達成するよう防大と密接に調整、防大側が計画した 19 日の卒業記念観閲式・在校生による見送りの行事に併せて 22 期生の防大ツアーを計画、防大にも御理解を頂いて、顕彰碑献花式や観閲式見学等を含め HCD を実施することが出来ました。

3 月 18 日　22 期生会総会・記念懇親会

18 日、22 期生会行事として総会と記念懇親会がよこすか平安閣で開催されました。雨の中、15 時頃から 22 期生の皆さんと御家族の約 170 名が逐次会場に集まり、会場ではあちこちで旧交を温める姿があり、昔話に盛り上がる中、総会が始まりました。

期生会総会では、22HCD 実行委員の松下氏から、会則の改正、新役員紹介等の議決及び紹介事項の説明があり、議事は順調に進められました。

総会終了後、久保学校長、岩田同窓会長等来賓が入場し、実行委員の田原氏の司会のもと、まず逝去された同期生 26 名の方々の学生時代の写真が映し出され、黙祷が捧げられました。その後、記念懇親会が始まり、期生会長・HCD 実行委員長の宮下氏から挨拶と翌日の防大ツアーに対する防大への謝辞が述べられました。

来賓からは、久保学校長から 22HCD 実施に対する祝辞が述べられ、岩田同窓会長からは祝辞とともに、22HCD を見習い 23HCD を実施する旨、22 期の先輩方を讃えながら述べられました。

総会の議事を進める松下氏

懇親会の司会を務める田原氏

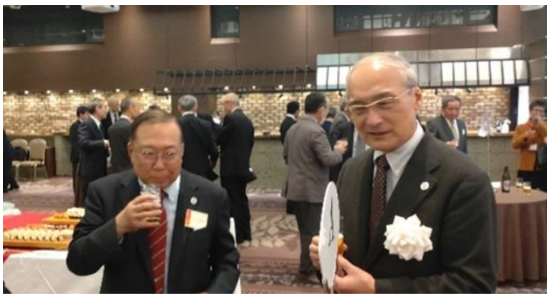
挨拶する期生会長　宮下氏

泉副会長による乾杯後、各テーブルでは歓談の輪が広がり、御家族を含め皆様は楽しい時間を過ごされました。会の途中、余興として、22 期生の畑中氏と「大河（タイガ）」の皆さんが津軽三味線の演奏を披露、また 22 期生の学生当時の各種映像が会場内に映し出され、会場は大いに盛り上がりました。さらに各大隊ごと、各校友会ごとの記念集合写真も撮影され、終盤には参加者が輪を作り肩を組んで逍遥歌と学生歌を歌い上げました。最後に、齊藤副会長による万歳三唱、井上副会長による乾杯が行われ、記念懇親会は幕を閉じました。

久保学校長　祝辞

岩田同窓会長　祝辞

泉副会長による乾杯


歓談する宮下期生会長と久保学校長

歓談する岩田同窓会長と久保田小原台事務局長

記念懇親会参加者全員での集合写真

津軽三味線の演奏を披露する畑中氏と「大河（タイガ）」

にぎわう会場内

歓談する御夫人たち

２２ＨＣＤを研修する２３期生

在学当時の映像を懐かしむ参加者

肩を組み逍遥歌・学生歌を歌う２２期生と御家族

齊藤副会長による万歳

井上副会長による中締めの乾杯

３月１９日　防大ツアー

19 日は晴天に恵まれ、朝から防大ツアーが始まりました。ツアーには御家族・御遺族を含め 145 名が参加、京急バス・私有車等で防大正門に到着し、防大職員の皆様に準備していただいた防衛学館内の控室に陸海空要員ごとに入り、宮下会長からの挨拶を受けました。

陸要員受付での宮下会長と井上副会長

防大への謝辞とツアー概要等について述べる宮下会長

全般説明後、防衛学館を出発し桜のつぼみがほころびかけた校内を移動、時計台前の階段で学校長・副校長等をお迎えして記念集合写真を撮影、その後殉職者顕彰碑献花式、卒業記念観閲式見学を行いました。

本館裏　時計台下階段での記念集合写真

顕彰碑前に集合した２２期生

献花・拝礼

観閲式を見学する２２期生と御家族・御遺族

卒業生を送る観閲式に整列する卒業生・在校生

昼は、東京湾を見渡せる学生食堂にて見学を兼ねた昼食会が行われました。実行委員の田原氏が当時の週番学生の合図を模して「食事が終わった者から別れてよろしい。食事はじめ！」と発声、参加の皆さんは「いただきます！」と応えて弁当を開きました。一斉喫食については現在は行っていない等の説明を受けましたが、やはり当時の一斉喫食にまつわる思い出話などに花が咲きました。

食事終了後は、HCD 参加の皆さんが学生会館で在校生に交じって防大土産等を買う姿が見られました。

「食事はじめ！」　「いただきます！」

学生会館売店は大盛況…

午後からは、指導教官の案内・説明を受けての学生舎見学、在校生による卒業生見送り行事見学等を行い、時代の変化を感じながらも学生当時に思いをはせ、充実した防大ツアーを楽しみました。

指導教官の説明を受け、学生舎を見学

卒業生見送り行事に集まった在校生

陸上競技場横の土手から見学

卒業生と在校生の絆を確認

卒業生の自撮りに応ずる学校長

22HCD を研修する 23 期生の皆様も、ツアー解散前には控室に再度集まり、23HCD 準備の話し合いを行いました。

<u>３月２６日　本科第６７期生等卒業式</u>

26 日は雨模様の中、卒業式本番を迎え、22HCD 実行委員の方々は 0730 防大に入り、受付準備等を始めました。この日は荒天行事となりましたが、本科 67 期生及び研究科学生等の卒業式に御家族・御遺族を含め 76 名の方が参列しました。

雨の中、桜を見ながら会場へ移動

卒業式は記念講堂で行われ、岸田総理、浜田防衛大臣等来賓御臨席のもと、代表学生に対して久保学校長から卒業証書が授与されました。また、学校長は式辞の中で、22 期生が HCD 行事として出席していることを紹介されました。

来賓訓示では、岸田総理からは、日本を第二のウクライナにしてはならないとして、厳しい安全保障環境下で幹部自衛官として任務に取り組むことになる卒業生への期待が餞の言葉として贈られ、浜田防衛大臣からは新たな防衛態勢構築に向けての積極的な貢献を求める言葉が卒業生に贈られました。

卒業式に参列する２２期生

写真を撮る森本氏

代表学生に対する卒業証書授与

式辞を述べる学校長

岸田総理訓示

浜田防衛大臣訓示

式典が進み、22 期生及び参列した防大同窓生は卒業生とともに学生歌を斉唱し、本科卒業生は代表学生の掛け声で一斉に帽子を放り上げ、駆け足で会場を後にしました。

一斉に帽子を投げる本科６７期卒業生

走り去った後は、椅子が倒れ帽子が散乱

その後、陸海空の制服に着替えた卒業生は、任命・宣誓式に臨み、陸海空幕僚長から曹長への任命と候補生指定を受け、陸海空代表者が岸田総理に宣誓文を読み上げました。

来賓退場時には、國分前学校長が 22 期生に一礼をされました。22 期生もこれに応え深々と一礼しました。22 期生からは自然と拍手が湧きあがりました。

任命・宣誓式終了後、22HCD 参加の皆さんは、式典会場で記念撮影を行いました。

陸海空代表から宣誓書を受け取る岸田総理

卒業式会場での記念撮影

撮影を終えた HCD 参加者は、防衛学館にもう一度集合し、22HCD の解散式を行いました。期生会長、陸海空副会長は、「次は HCD2 で再会しよう」と参加者に力強く呼びかけ、雨の降る中ではありましたが満開の桜の下、一行は小原台を離れました。

解散式での宮下会長挨拶

陸海空各副会長から一言ずつ

全般を取り仕切った田原氏

これまで、コロナ蔓延のため２１ＨＣＤは学校長招待を辞退し顕彰碑献花式のみを実施、昨年度実施予定であった２２ＨＣＤは延期され、令和４年度ようやく実施に漕ぎ着けました。

この間、足掛け４年にわたり辛抱強く準備を進められ、直前の日程変更にもかかわらず充実した有意義なＨＣＤを実施された宮下実行委員長以下実行委員の皆様の活動に対して、心から敬意を表しますとともに、卒業式の日程変更に応じて１９日の防大ツアーを計画する等柔軟かつ懇切丁寧に支援いただきました久保田防衛学教育学群長（小原台事務局長）をはじめとする防大職員の皆様に心から感謝を申し上げます。

終わりにあたり、満開の桜を見ながら勇躍母校を巣立っていった本科第 67 期生等卒業生の今後の御活躍を期待致しますとともに、来年は在校生に見送られる形での伝統ある卒業式が挙行され、本科第 68 期生等の卒業を祝い、卒業後 40 年以上を経過しても絶えることのない同期生の強い絆を再確認する 23HCD が無事実現されますことを祈念申し上げます。

（防大同窓会本部事業部ＨＣＤ担当　３０期陸　大西正浩　記）

◇第２４回防衛大学校同窓会ゴルフ大会

24 回目を迎えた恒例のゴルフ大会は、千葉カントリー倶楽部川間コース（東、南、西）において、シニアの部（11 期生から 20 期生）が令和 4 年 9 月 16 日（金）に、レギュラーの部（21 期生から 31 期生）が 9 月 9 日（金）に開催されました。

コロナウイルスの影響で 3 年ぶりの開催となりましたが、両日ともに天候に恵まれ、熱戦が繰り広げられました。

【シニアの部】

シニアの部は、総勢 96 名が参加し、各期上位 5 名のネット成績で争われました。また、磯部副会長が大会会長代理として参加しました。 団体戦（ネット）は、シニアの部に初参加の 20 期生が優勝の栄冠を手にしました。また、11 期生は今回が最後の大会参加となりました。 成績は、次のとおりです。

期　別	ＮＥＴ		
	順　位	ＳＣＲ	ＡＶＥ
１１期	９	３７７．８	７５．６
１２期	１０	３８１．０	７６．２
１３期	２	３６４．６	７２．９
１４期	８	３７６．０	７５．２
１５期	３	３６５．８	７３．２
１６期	７	３７２．２	７４．４
１７期	６	３６８．２	７３．６
１８期	４	３６６．２	７３．２
１９期	５	３６７．６	７３．５
２０期	優　勝	３６２．４	７２．５

個人戦（ネット）は、13 期生　菅　博敏さん（スコア：69.4（HC9.6））が優勝しました。

また、個人戦（グロス）の各コースのベストグロスは、次の方が獲得しました。

・東南コース：19 期生　野田　耕平さん（スコア：78）
・南西コース：19 期生　武冨　龍治さん（スコア：73）
・西東コース：18 期生　七原　伸郎さん（スコア：78）

1 期生から寄贈された個人総合ベストグロス賞のカップは、19 期生　武冨さんが 9 人目の保持者となりました。

挨拶をする磯部副会長

シニアの部　団体戦優勝（２０期生）の面々

各コース　ベストグロス賞（総合ベストグロス重複）受賞者

個人総合ベストネット賞受賞者

【レギュラーの部】

レギュラーの部は、初参加の 30 期と 31 期が加わり総勢 100 人が参加し、各期上位 7 名のグロス及びネット成績で争われました。また、岩田会長が大会会長として参加しました。 団体戦では、ネット、グロスともに 24 期生が優勝しました。
なお、30 期生は 6 名の参加となり、団体戦表彰の対象人員である 7 名に満たなかったため、個人戦のみでの参加となりました。 成績は次のとおりです。

期　別	ＧＲＳ			ＮＥＴ		
	ＳＣＲ	ＡＶＥ	順　位	ＳＣＲ	ＡＶＥ	順　位
２１期	648	92.6	8	536.4	76.7	8
２２期	642	91.7	7	513.8	73.4	2
２３期	627	89.6	5	531.0	75.9	6
２４期	606	86.6	優勝	511.2	73.0	優勝
２５期	626	89.4	4	522.0	74.6	3
２６期	707	101	10	543.0	77.6	10
２７期	607	86.7	2	526.4	75.2	5
２８期	623	89.0	3	534.0	76.3	7
２９期	633	90.4	6	525.0	75.0	4
３０期	－	－	－	－	－	－
３１期	663	94.7	9	538.2	76.9	9

個人戦（ネット）は、21 期生　野村　勉さん（スコア：68.8（HC19.2）が優勝しました。また、個人戦（グロス）の各コースのベストグロスは、次の方が獲得しました。

・東南コース：30 期生　益子　卓さん　　（スコア：80）
・南西コース：29 期生　加藤　満春雄さん（スコア：75）
・西東コース：24 期生　益子　光久さん　（スコア：84）

挨拶をする岩田会長

レギュラーの部　団体戦（グロス・ネット共）
優勝（２４期生）の面々

レギュラーの部　各コースベストグロス賞受賞者
（左翼は、受賞者の代行者です。）

総合ベストネット賞受賞者

（３０期　陸　益子　卓　記）

◇第２５回防衛大学校同窓会テニス大会

令和 4 年 10 月 11 日（火）、コロナの影響により 2 年連続で実施できなかった防大同窓会テニス大会が、3 年ぶりに千葉市蘇我スポーツ公園フクダ電子ヒルスコートで開催されました。近年有明テニスの森公園や昭和の森テニスセンターなどで実施されてきましたが、一昨年からフクダ電子ヒルスコートでの開催を計画してきました。しかし、ともに中止となったことから、本大会がフクダ電子ヒルスコートでの初の開催となりました。

会場風景

村山大会副会長（２３期）の開会式挨拶

1 期生から 8 期生までの同窓生が集まって平成 10 年に始まった同窓会テニス大会は今年で 25 回目となります。参加する期が増えるに従い、クラス分けをして実施してきました。本年度は 1 期から 31 期までを 5 つのクラスに分けて競技が行われました。まず 1 期から 7 期までは①レジェンドクラスとしてダブルスのペアを換えて勝率で競う個人戦を、次に 8 期から 13 期までは②スーパーグランドシニアクラスとして同期ペアによる個人戦を行いました。14 期から 19 期は③グランドシニアクラス、20 期から 25 期は④シニアクラス、26 期から 31 期までは⑤レギュラークラスとし、これら③から⑤の 3 つのクラスは各期５個ペア 10 人による団体戦で優勝を競いました。

今年の特色は何と言ってもコロナの感染を防止しながら大会を運営することにありました。感染防止対策として、参加者には健康管理チェックシートを記入させ、

期ごとでまとめて提出することを義務付けました。また例年集合して実施していた開会式は、本部席から村山大会副会長(23 期)が開会式挨拶を、荒木アシスタントディレクター（27 期）がルール説明を、そして小岩ディレクター（26 期）が管理事項の説明をマイク放送で行いました。また表彰式とそれに続く閉会式も集合は受賞者のみの必要最小限とし、屋外において隣人との間隔を十分に確保して行われました。

一方、試合の中ではこの大会のため遠くは福岡県や山口県から来た方を含む各選手が、晴れ渡る青空の下、優勝杯の獲得を目指し期を代表する選手として年齢を感じさせない迫力あるプレーを 16 面のコート上で繰り広げました。秋霖の時期にもかかわらずプレーには絶好のコンディションに恵まれ、一人の怪我人もなく、予定されていた全ての試合が計画通りに実施されました。大会参加を通じて同期生の絆を強固にすると共に、選手の他、大会関係者を含め総勢約 170 名の同窓生が親交を深めることができた素晴らしい競技会となりました。

試合前のオーダー交換

熱戦の様子

日頃の成果が試されるとき　　２勝２敗で迎えた決勝で全力応援

本大会において防大同窓会からは、吉田副会長が 25 期の選手として参加するとともに大会会長代理として大会を視察し、閉会式での挨拶及び優勝杯授与を行いました。閉会式の中で吉田副会長は、「3 年ぶりとなる大会が盛会のうちに、そしてケガ人も無く、終了できたことを嬉しく思います。競技会の企画、準備、運営に当たられた宮下大会運営委員長以下運営委員の皆様のご苦労に感謝します。各種の競技会を通じて期生会が活性化されることが同窓会の活性化につながると確信しています。これからもテニスを通じて健康の維持増進と各期生会の団結強化に尽力していただきたい。」と挨拶し、来年の大会がさらなる同窓生の団結に寄与することへの期待が示され、参加者一同は、また来年に向け頑張っていこう という気持ちを新たにしていました。

笑顔で同期との記念撮影　　クラス別優勝カップ

吉田同窓会副会長(２５期)の閉会式挨拶

試合結果は次の通り。

レジェンドクラス　（１期～７期） 個人戦	優　勝：龍岡資臣（７期） 龍岡睦子（同率優勝） ３　位：松本　勲（５期）
スーパーグランドシニアクラス（８期～１３期） 同期ペアによる個人戦	優　勝：小林・高間ペア（９期） 準優勝：新田・秋山ペア（１２期） ３　位：渡部・白畑ペア（１１期）
グランドシニアクラス（１４期～１９期） 各期５個ペア１０人による団体戦	優　勝：１８期 準優勝：１６期 ３　位：１７期
シニアクラス（２０期～２５期） 各期５個ペア１０人による団体戦	優　勝：２１期 準優勝：２５期 ３　位：２４期
レギュラークラス（２６期～３１期） 各期５個ペア１０人による団体戦	優　勝：２６期 準優勝：２８期 ３　位：３０期

レジェンドクラス優勝の龍岡夫妻（中央）と吉田副会長（右）

スーパーグランドシニアクラス優勝の小林・高間ペア

グランドシニアクラス優勝の１８期

シニアクラス優勝の２１期

レギュラークラス優勝の２６期

大会役員等

大会役員	大会会長	岩田清文（23 期）（同窓会会長）代理　吉田浩介（25 期）
	大会副会長	村山信男（23 期）
	大会顧問	井川　宏（2 期）、龍岡資臣（7 期）
	大会総務	森末浩史（30 期）、朝倉　譲（31 期）
競技役員	運営委員長	宮下今朝芳（20 期）
	ディレクター	小岩義紀（26 期）
	ｱｼｽﾀﾝﾄ･ﾃﾞｨﾚｸﾀｰ	荒木淳一（27 期）
	会　　計	鶴田眞一（28 期）
	レフリー	荒木淳一（27 期）（兼）

（３０期　空　森末浩史　記）

◇第２２回防衛大学校同窓会囲碁大会

第 22 回防大同窓会囲碁大会が令和 4 年 11 月 19 日（土）、日本棋院本院（東京市ヶ谷）において 3 年ぶりに開催され、全国から同窓生 80 名が参加しました。

前回大会まではランク別の競技でしたが、新型コロナの影響で例年どおりの対戦が組めないため、5 名以上の期、4 名以下の期でグループ分けした期別対抗で行われました。競技はグループ混成で 4 名の対局組を編成し総当たり 3 回戦の対局で実施されました。

大会運営は

・大会会長　　村川副会長
・競技委員長　高比康之（1 期）
・当番幹事　　北村義明（22 期）
・大会総務　　同窓会囲碁担当 2 名

の体制で行い、大会は計画どおり進行しました。また参加者は大会開始まで自由対局を楽しまれました。

大会前の自由対局

開会式における高比競技委員長挨拶

開会式において高比競技委員長が挨拶され、新型コロナ禍であったにもかかわらず大会が開催できたことへのお祝いを述べられました。

競技は、1 回の対局時間 80 分、選手の持ち時間 40 分で実施されました。対局開始序盤は選手が碁盤に石を打つ音だけが響いていましたが、対局が進むに連れ早く終わった選手は談笑したり、対局中の同期を無言で見守ったり（プレッシャー？）段々にぎやかになって行き、和やかな雰囲気の中競技は進行しました。

対局開始　　対局序盤　　対局終盤

村川同窓会副会長（大会会長）が会場到着後、高比競技委員長に挨拶、懇談され、高比委員長から新型コロナ禍で開催できたことの喜びと同窓会の大会である囲碁大会に対する支援への感謝の意を表され、村川副会長からは大会の開催と盛会についてお祝いを述べられました。

競技委員長と大会会長との懇談　　当番幹事を激励される大会会長

閉会式では、大会会長から各グループの優勝チーム及び、全勝した選手に賞品が授与され、最後に大会会長が「新型コロナ禍で準備にご苦労された高比競技委員長をはじめとした大会役員、全国津々浦々から参加された選手の皆様に深く敬意を表します。

来年こそは今回以上により盛大に開催されることを祈念し、また来年ここでお会いできることを楽しみにして元気にお過ごしください。」と挨拶され大会は終了しました。

賞品の授与（期別対抗）

賞品の授与（全勝者）

閉会式における村川大会会長の挨拶

大会結果は次のとおりです。

・期別対抗　５名以上チーム：優　勝　　９期
　　準優勝　　４期
　　３　位　　６期
　　４名以下チーム：優　勝　１４期
　　準優勝　１６期
　　３　位　２２期

・全勝者　原昌彦(1 期)、吉田暁路(2 期)、清水總一(4 期)、山下永二(6 期)、石川佑二(9 期)、庄山正気(9 期)、中治一秀(14 期)、暮正博(16 期)、宮原從芳(16 期)、北村義明(22 期)、久保田和信(24 期)

５名以上の部優勝：９期

４名以下の部優勝：１４期

第 23 回囲碁大会は元通りのルールで開催されることを祈念します。

（３０期　海　時久寛司　記）

◆会長ルーム・活動録

◇防衛大学校開校７０周年記念事業

令和 4 年 11 月 13 日（日）、資料館１階　槇記念室において、岩田会長をはじめ、村川副会長、久保田小原台事務局長の出席のもと、防衛大学校開校 70 周年記念事業の一環として、國分良成前学校長のレリーフ贈呈式が行われました。

歴代学校長のレリーフを贈呈するようになった経緯は、60 周年事業として作製したのが始まりであり、今回、70 周年に合わせて前回以降に新たに歴代学校長の仲間入りをされた國分前学校長のレリーフを贈呈することになったものです。

レリーフ贈呈式では、岩田会長から、國分前学校長のご功績を称えるとともに 70 周年記念行事としてレリーフを作製した経緯についてのご挨拶があり、引き続いて久保学校長へレリーフが贈呈されました。

その後、國分前学校長の立ち合いのもとに、資料館 2 階へのレリーフ展示が行われ、式の結びに、國分前学校長を中央に出席者全員で記念撮影が実施されました。

レリーフ贈呈式での岩田会長挨拶

久保学校長へのレリーフ贈呈

國分前学校長との記念撮影

参加者による記念撮影

◇防衛大学校令和４年度開校記念祭及び顕彰碑献花式への参加

令和 4 年 11 月 13 日（日）、岩田会長は、防衛大学校で実施された第 70 回開校記念祭及び顕彰碑献花式に参加しました。

13 日午前に人文科学館南側顕彰碑前において行われた顕彰碑献花式には、各期代表も参列し、110 柱の御霊に哀悼の誠を捧げました。本年度は新たに 2 名の顕彰者が祀られ、厳粛に式が挙行される中、久保学校長に引き続き岩田会長が追悼の辞を奉読し、御霊の安らかならんことと御遺族のご健勝を祈念しました。

また、本顕彰碑献花式に先立ち本館会議室で久保学校長から同窓各期代表に対しご挨拶が行われました。

13 日午後からの記念式典・観閲式では、学生による威風堂々たる観閲行進が行われました。この際、卒業生を中心とした飛行部隊による祝賀飛行が式典に花を添えました。

なお、本年度の開校記念祭は、巷での感染症蔓延により昨年同様、一時は開催が危ぶまれたものの、来校者を学生家族に限定し、行事の実施内容などを厳選する等、先輩方から受け継がれた「１本の線」のように輝かしい伝統を守るため、学校職員及び全学生が一丸となって新型コロナウィルス感染防止対策を講じ、無事に開催されることとなり、「意志と栄光～70 年のその先へ」をテーマに令和 4 年 11 月 12 日（土）から 13 日（日）の 2 日間開催され、観閲式、棒倒し、校友会展示及び学生隊ステージ等が行われました。

久保保学校長による顕彰の辞

顕彰碑献花式における追悼の辞

村川副会長（中央）による献花

久保学校長からの各期同窓代表へのご挨拶

ご遺族との会食

顕彰室での記念撮影

記念式典

観閲行進

（31 期陸　小田英明　記）

◇令和４年度防衛大学校卒業式典への出席

令和 5 年 3 月 25 日（土）及び 26 日（日）、防衛大学校　本科第 67 期学生、理工学研究科前期課程第 60 期学生、同後期課程第 20 期学生、総合安全保障研究科前期課程第 25 期学生及び同後期課程第 12 期学生に対する卒業証書授与式及び卒業式典が挙行され、26 日(日)に岩田清文同窓会長が卒業式典に出席しました。

今年も新型コロナウィルス感染症拡大防止の観点から来賓の参加が限定されるとともに、午餐会が中止となりましたが、これまで中止されていた HCD（ホームカミングデー）も４年ぶりの再開、参加人員を限定したご家族の参加等、徐々に新型コロナ感染症拡大前の卒業式典へ戻る兆しもみられました。

26 日（日）、岸田内閣総理大臣のご臨席の下で卒業式典が行われ、久保学校長が本年度の卒業生である本科学生 467 名（留学生 21 名を含む）及び研究科学生 72 名（留学生 9 名を含む）の学生代表者 18 名に卒業証書を手渡され、式辞において「わが国に万が一のことが生起した場合、その対応の中心になるのは皆さんです。今後も精進を続け、皆さん全員が嘱望された人生を全うされることを祈念します。」と述べられました。

岸田内閣総理大臣は、「自衛官としての新たな一歩を踏み出す皆さんは、軍事専門的知見や技術を磨くだけでなく、高い倫理観と使命感を持って任務に当たることが要求され、世界が歴史の分岐点を迎える中、背負うものは、極めて大きく、民主主義国家における実力組織のスタンダードとも言える、プロフェッショナリズムに徹し、国防という崇高な職務に邁進(まいしん)して、国民の負託に応えてくれることを期待しています。」と訓示されました。

また、浜田防衛大臣から「防衛力の中核たる自衛隊員が能力を発揮するため、優れた人材が活躍する勤務環境整備の必要性が高まる中、幹部自衛官として自衛隊の中核を担っていく諸君には、隊員同士の信頼関係を構築することが極めて重要であるとの認識の下、より良い勤務環境の整備に尽力されんこと要望します。」と訓示されました。来賓代表・新日鉄名誉会長・前日本商工会議所会頭 三村明夫 氏から「グローバル人材たれ！グローバル人材とは違った文化的背景を有する国との交流において、相手の言動をよく理解した上で自らの考えを主張しコミュニケーションがとれる人材であって、国内においても異なった組織の相手との対話でも通ずる能力を保持し、その能力は座学のみではなく苦しい立場に身を置き苦労することで身に付くものであります。新たなる人生における諸君の健闘を祈ります。」との言葉を贈られた。

卒業生は、2 年生への進級の時期から約 3 年にわたり新型コロナ感染症拡大防止の影響を受け、これまで経験したことない大きな混乱とその対応に奔走してきた４年間

の歩みを思い浮かべながら、代表による答辞にもあるように「幹部自衛官の責務と期待が大きくなる中、国防の任は重く道遠きものであるが、この４年間の学びと思い出がこれからの道を照らす明かりとなり背中を押してくれる。我々はその使命を自覚し、仲間とともにその責任を果たすべく着々と歩んでいきたい」との決意を胸に、学生歌斉唱の後に帽子を高々と舞い上げ会場を後にしました。

続いて行われた一般幹部候補生の任命・宣誓式では、卒業生は陸・海・空の制服に着替え、各要員別に陸曹長、海曹長、空曹長に任命され、一般幹部候補生を命ぜられました。そして、全員で宣誓を行い、岸田内閣総理大臣に宣誓書を手渡しました。

光輝くまなざしで宣誓する若者 400 名のこれからの奮闘を心から願いたい。

（３０期陸　山坂泰明　記）

内閣総理大臣に対する栄誉礼

卒業証書授与

久保学校長式辞

内閣総理大臣訓示

浜田防衛大臣訓示

来賓代表祝辞

（新日鉄名誉会長 前日本商工会議所会頭　三村 明夫氏）

卒業生答辞

帽子投げ

一般幹部候補生（陸・海・空） 任命・宣誓

◆連絡事項

◇ 令和３年度防衛大学校同窓会決算書

【単位：円】

区分		事業等		03年度予算	03年度決算額	差異	備考
一般会計	収入	同窓会費		20,680,000	11,365,732	−9,314,268	
		預貯金金利・国債金利		1,630,000	1,634,288	4,288	
		寄付			0	0	
		雑収入		1,420,000	116,000	−1,304,000	
		資産からの繰出		1,270,000			
		収入合計①		25,000,000	13,116,020	−10,613,980	
	支出	母校の充実・発展への寄与	各種競技会支援	390,000	670,000	280,000	メダル代等
			期生会発会等支援	700,000	32,165	−667,835	会長他参加経費
			学生の部隊実習支援	1,060,000	800,000	−260,000	支援金
			顕彰碑献花式支援	510,000	57,742	−452,258	花輪代等
			開校記念祭支援	2,070,000	2,033,594	−36,406	支援金等
			校友会対外活動支援	1,000,000	1,000,000	0	支援金
			学術向上策支援	210,000	210,046	46	副賞代等
			同窓生著作等の寄贈	70,000	60,400	−9,600	「指揮官たちの決断」他32冊等
			国際交流支援	1,200,000	362,770	−837,230	
			小計②	7,210,000	5,226,717	−1,983,283	
		会員相互の親睦交流	同窓会HPの運営	450,000	47,721	−402,279	ウェブ管理等
			会員の慶弔業務	350,000	294,707	−55,293	生花、弔電代等
			各種競技大会による交流	270,000	800	−269,200	
			卒業留学生との交流	30,000	0	−30,000	
			HVD支援(＃44)	330,000	300,000	−30,000	
			HCD支援(＃22)	360,000	302,300	−57,700	
			HCD2支援(＃8、＃9)	80,000	53,180	−26,820	＃9のみ
			講演会・懇親会の実施	2,700,000	0	−2,700,000	
			小計③	4,570,000	998,708	−3,571,292	
		社会活動への寄与	安全保障講座支援	100,000	100,000	0	助成金
			小計④	100,000	100,000	0	
		会務運営基盤の充実	代議員会の実施	2,100,000	551,975	−1,548,025	印刷代、交通費、通信費等
			同窓会名簿の維持	50,000	24,100	−25,900	交通費
			期生会名簿の作成支援	40,000	0	−40,000	
			会費納入の促進	460,000	286,142	−173,858	交通費(各幹候校等)、通信費等
			地域支部等の活性化	580,000	1,540	−578,460	交通費
			防衛医大同窓会との連携	20,000	0	−20,000	
			Web会議システムの維持・管理	100,000	0	−100,000	
			小計⑤	3,350,000	863,757	−2,486,243	
		検討事項	「高みPJ」への貢献のあり方	0	0	0	
			国際交流支援業務の検討	50,000	0	−50,000	
			小計⑥	50,000	0	−50,000	
		事務費等	事務費	750,000	475,038	−274,962	コピー、購読料等
			事務員雇用費	1,584,000	1,584,000	0	132,000円/月×12月
			通信費	300,000	426,279	126,279	電話代等
			交通費	510,000	400,510	−109,490	
			会議費	220,000	114,471	−105,529	お茶代等
			事務局室賃貸費	5,400,000	5,403,113	3,113	賃貸料、電気代等
			小原台事務局運営費	150,000	39,649	−110,351	ポケットWi-Fi等
			小計⑦	8,914,000	8,443,060	−470,940	
		支出合計⑧(＝②＋③＋④＋⑤＋⑥＋⑦)		24,194,000	15,632,242	−8,561,758	
	予備費	予備費⑨		806,000	0	−806,000	
	支出計⑩(＝⑧＋⑨)			25,000,000	15,632,242	−9,367,758	
資産への繰入れ額(①—⑩)					−2,516,222		

区　分		事業等	03年度予算	03年度決算額	差　異	備　考
特別会計	収入	「防衛の務め」再刊行	0	525,600	525,600	図書販売
		収入計(①)	0	525,600	525,600	
	支出	「防衛の務め」再刊行	0	0	0	
		翌年度へ繰越し		525,600	525,600	
		支出計(②)	0	525,600	525,600	
令和3年度収支(③=①−②)			0	0	0	

区　分		事業等	03年度予算	03年度決算額	差　異	備　考
特別会計	収入	防大70周年事業支援準備	2,000,000	0	−2,000,000	一般会計から繰入
		収入計(①)	2,000,000	0	−2,000,000	
	支出	防大70周年事業支援準備	2,000,000	0	−2,000,000	積立金
		翌年度へ繰越し				
		支出計(②)	2,000,000	0	−2,000,000	
令和3年度収支(③=①−②)			0	0	0	

区　分		事業等	03年度予算	03年度決算額	差　異	備　考
特別会計	収入	海外支部の活動促進	1,300,000	0	−1,300,000	一般会計から繰入
		収入計(①)	1,300,000	0	−1,300,000	
	支出	海外支部の活動促進	1,300,000	0	−1,300,000	海外出張
		翌年度へ繰越し	0	0	0	
		支出計(②)	1,300,000	0	−1,300,000	
令和3年度収支(③=①−②)			0	0	0	

区　分		事業等	03年度予算	03年度決算額	差　異	備　考
寄付会計	収入	寄付金	0	0	0	寄付金なし
		収入計(①)	0	0	0	
	支出		0	0	0	
		支出計(②)	0	0	0	
令和3年度収支(③=①−②)			0	0	0	

◇ 令和５年度期生会長・代議員名簿

2023. 4. 20 現在

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸：氏　名	海：氏　名	空：氏　名	氏名	要員
1	深山　明敏 (※)	陸					
2	高岩　利彦 (※)	陸					
3	西元　徹也	陸	及川　雅道	手塚　正水	出口　哲夫	野本　眞二	陸
4	田中　厚彦 (※)	空					
5	白石　一郎	陸	久光　禧敬	冨　一郎	齋藤　賢爾	浅野　勇蔵	陸
6	阿部　英輔	陸	池田　勝	福塚　啓二	星野　元宏	福塚　啓二	海
7	田中　伸昌	空	杉田　明傑	高木　基博	伊藤　文夫	伊藤　文夫	空
8	吉川　武秀	空	山崎　幹夫	山本　紀義	安田　紘	尾頭　誠	空
9	藤田　幸生	海	小島　捷利	功刀　正文	日高　久萬男	中野　正治	空
10	石飛　勇次	陸	村松　洋一	坂東　勝昭	川田　哲雄	村松　洋一	陸
11	石川　亨	海	洞澤　佳廣	竹村　訓	赤羽　益三	後藤　健次	陸
12	相田　哲彦	空	藤本　四郎	串田　貫治	橋本　康夫	高岡　邦夫	空
13	山下　輝男	陸	篠田　芳明	新宮領　篁	花岡　芳孝	菅原　純	陸
14	稲葉　憲一	空	寄田　修	齋藤　隆	稲葉　憲一	有井　一弘	空
15	林　直人	陸	瓦谷　育夫	平山　為祥	江口　啓三	佐藤　誠喜	陸
16	折木　良一	陸	石川　由喜夫	橘　恒紀	堀　好成	石川　由喜夫	陸
17	赤星　慶治	海	廣瀬　誠	赤星　慶治	永田　久雄	石村　澄雄	海
18	外薗　健一朗	空	植木　美知男	色川　喜美夫	長尾　齊	長尾　齊	空
19	岩﨑　茂	空	師岡　英行	宮浦　弘兒	下平　幸二	風間　敏榮	陸
20	佐藤　貞夫	陸	西村　智聡	加藤　耕司	渡邊　至之	今井　惠治	陸
21	河野　克俊	海	荒川　龍一郎	山本　高英	小野田　治	山本　高英	海
22	宮下　寿広	陸	田原　昭彦	畑中　裕生	福井　正明	石野　貢三	空
23	岩本　豊一	陸	藤井　貞文	福本　出	清藤　勝則	岩﨑　親裕	陸
24	杉山　良行	空	武内　誠一	原田　哲郎	半澤　隆彦	半澤　隆彦	空
25	髙鹿　治雄	海	岡部　俊哉	河村　正雄	吉田　浩介	徳丸　伸一	海
26	尾上　定正	空	深津　孔	堂下　哲郎	尾上　定正	山口　浩樹	空
27	小林　茂	陸	小林　茂	副島　尚志	橋本　尚典	穂積　文孝	空
28	田浦　正人	陸	田浦　正人	真鍋　浩司	渡邊　博史	田浦　正人	陸
29	馬場　邦夫	陸	中村　浩之	中尾　剛久	長島　純	時藤　和夫	空
30	堀切　光彦	陸	山﨑　繁	時久　寛司	上ノ谷　寛	篠原　啓一郎	陸
31	前田　忠男	陸	山口　和則	今村　靖弘	後藤　雅人	山口　和則	陸
32	阿部　睦晴	空	池田　頼昭	梶元　大介	柴田　利明	植村　茂己	空
33	中塚　千陽	空	山根　寿一	齋藤　聡	沖野　克紀	沖野　克紀	空
34	佐藤　信知	空	荒井　正芳	大西　哲	小笠原　卓人	小笠原　卓人	空
35	稲月　秀正	空	戒田　重雄	伍賀　祥裕	吉村　一彦	熊谷　三郎	空

※

指定窓口会員

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸：氏　名	海：氏　名	空：氏　名	氏名	要員
36	寺﨑　隆行	空	松永　浩二	石巻　義康	寺﨑　隆行	松永　浩二	陸
37	宇佐美　和好	空	小川　隆宏	浦口　薫	宇佐美　和好	宇佐美　和好	空
38	石井　浩之	空	浅賀　政宏	濱崎　真吾	白井　亮次	山崎　武志	空
39	湯下　兼太郎	陸	湯下　兼太郎	平田　利幸	中川　一	湯下　兼太郎	陸
40	清水　徹	海	梨木　信吾	川野　邦彦	石引　大吾	兵庫　剛	陸
41	堤田　和幸	海	小林　貴	堤田　和幸	中谷　大輔	堤田　和幸	海
42	佐瀬　智之	海	横山　信太郎	佐瀬　智之	富川　輝	宮本　澄子	陸
43	鎌田　淳	空	澤　繁実	江畑　康孝	志津　雅啓	志津　雅啓	空
44	髙橋　秀典	海	鈴木　攻佑	阿部　直樹	原田　理	阿部　直樹	海
45	青山　佳史	陸	庄司　秀明	岡澤　智和	坂田　靖弘	庄司　秀明	陸
46	田村　弘範	海	石岡　直樹	近藤　太郎	寺林　洋平	向　康司	海
47	吉水　憲太郎	陸	清田　裕幸	笠原　健治	中里　悠花	清田　裕幸	陸
48	和田　嵩一	海	桐谷　高弘	柏木　祐一郎	齋藤　真吾	柏木　祐一郎	海
49	山上　剛史	空	松浦　秀俊	小沼　洋祐	山上　剛史	山上　剛史	空
50	吉井　拓也	陸	益田　一宇	八木　佑己	阿部　竹浩	益田　一宇	陸
51	鬼塚　勇	陸	鬼塚　勇	林　大佑	森嶋　倫	鬼塚　勇	陸
52	成田　優	陸	成田　優	岡田　航	荒木　敬	成田　優	陸
53	濵田　卓	空	江嶋　宏次	松崎　圭祐	来栖　克則	濵田　卓	空
54	金澤　慧人	空	角丸　公康	垣内　隼斗	内藤　昌孝	金澤　慧人	空
55	若月　豪	陸	若月　豪	中村　友哉	加治　政樹	若月　豪	陸
56	松尾　聡一郎	陸	松尾　聡一郎	田中　結貴	舟津　貴正	松尾　聡一郎	陸
57	我妻　国明	陸	久保　翔平	松村　駿明	大藪　秀斗	我妻　国明	陸
58	戸口　真	海	秋島　一弥	浦山　修太朗	河野　健	戸口　真	海
59	屋代　昌也	陸	渡邊　一生	馬渡　淳司	宮川　啓一	屋代　昌也	陸
60	浜野　広大	陸	田村　洋人	畠山　尚己	庄司 和正	今尾　友哉	陸
61	久米井　勇馬	空	池上　好古	神作　友陽	工藤　将人	松本　龍二	海
62	上中　龍基	空	神木　康誠	唐川　航輝	江打　諒馬	熊木　礼於奈	陸
63	武石　太一	海	筒井　健司	笠原　豪	久保田　祥平	舟林　翼	陸
64	梅村　俊海	海	須田　悠介	森田　雄也	小川　隼人	門馬　明富	陸
65	吉田　敦	海	横山　慶次郎	坂東　渉伍	山本　悠馬	小俣　裕紀	陸
66	石井　涼子	海	大山　智也	佐藤　日向子	町田　光	佐地　祥太朗	陸
67	堀越　智也	海	嶋田　透哉	髙田　虎哉	八尋　翼	堀越　智也	海

◇地域支部役員

2023. 4. 20 現在

所属支部	役職	氏名	期	要員
北海道地域支部	支部長	加藤　幸治	14	陸
	事務局長	梅木　正造	38	陸
東北地域支部	支部長	小松　宏行	21	陸
	事務局長	若生　明智	27	陸
栃木地区支部	支部長	正岡　富士夫	15	空
	事務局長	正岡　富士夫	15	空
群馬地区支部	支部長	石橋　輝治	5	陸
	事務局長	小島　健二	14	空
北陸拡大地区支部	支部長	濱谷　隆平	6	陸
	事務局長	濱谷　隆平	6	陸
東海拡大地区支部	支部長	今枝　隆昌	19	陸
	事務局長	川村　大介	25	海
関西地域支部	支部長	酒井　健	19	陸
	事務局長	大島　龍一朗	31	陸
鳥取地区支部	支部長	吉岡　元	10	空
	事務局長	山本　洋	21	陸
島根地区支部	支部長	西村　充雄	25	陸
	事務局長	田中　秀文	35	陸
岡山地区支部	支部長	物部　明徳	22	空
	事務局長	植月　將元	22	陸
広島地区支部	支部長	佐藤　正志	22	海
	事務局長	土肥　弘実	25	海
山口地区支部	支部長	峰岡　偉津夫	15	海
	事務局長	落合　直巳	21	陸
四国拡大地域支部	支部長	宇草　茂	18	陸
	事務局長	松村　朝生	29	陸
徳島地区支部	支部長	福田　忠典	11	陸
	事務局長	山崎　忠雄	19	陸
香川地区支部	支部長	宇草　茂	18	陸
	事務局長	松村　朝生	29	陸
愛媛地区支部	支部長	小原　友弘	21	陸
	事務局長	津田　敦彦	38	空
高知地区支部	支部長	今村　功	15	陸
	事務局長	川田　公一	16	空

所属支部	役職	氏名	期	要員
九州地域支部	支部長	野田　文久	24	陸
	事務局長	田代　勉	25	陸
福岡地区支部	支部長	野田　文久	24	陸
	事務局長	田代　勉	25	陸
佐賀地区支部	支部長	福井　秀平	23	陸
	事務局長	福岡　龍一郎	26	陸
長崎地区支部	支部長	大平　愼一	20	海
	事務局長	広井　豊明	21	海
熊本地区支部	支部長	佐藤　晃章	19	陸
	事務局長	長尾　民穂	19	陸
大分地区支部	支部長	藤田　太	20	陸
	事務局長	加来　仁信	23	陸
宮崎地区支部	支部長	大岐　継寛	15	陸
	事務局長	金丸　直史	19	空
鹿児島地区支部	支部長	柴村　敬二	18	陸
	事務局長	樺山　一孝	29	陸
沖縄地域支部	支部長	渡名喜　邦夫	21	海
	事務局長	欠		
小原台クラブ	会長（支部長）	宮田　晃	25	海
	事務局長	及川　正稔	28	陸
桜華会	会長（支部長）	塚口　千枝（平松）	40	陸
	事務局長	嶋津　悠加（黒田）	45	空

◇ 令和５年度同窓会本部役員名簿

職　　名		氏　名	期	要員
会　　長		村川　豊	23	海
副会長		小林　茂	27	陸
		佐藤　誠	26	海
		丸茂　吉成	27	空
	［統合幕僚長］	―		
理　事	【事務局長】	上尾　秀樹	29	陸
	【事務局長補佐】	欠		
		中西　正人	27	海
		山田　真史	28	空
	［防大教授］	板宮　敬悦	29	陸
	［統幕総務部長］	青木　誠	35	陸
	［陸幕監理部長］	岸良　知樹	38	陸
	［海幕総務部長］	稲田　丈司	34	海
	［空幕人事教育部長］	倉本　昌弘	37	空
会計監事		増田　潤一	26	陸
		星指　隆	27	陸
		小島　昌二	26	海
		池畠　暢也	26	空

◇ 令和５年度事務局員名簿

	職　名		氏　名	期	要員
総 務	部 長		平栗 浩一	29	陸
	副部長		森竹 賢全	29	海
	SA（海外支部事項）		飯田 重喜	28	陸
	担当	総 務	山坂 泰明	30	陸
		新規事業	佐藤 幸喜	30	空
		国際交流支援	見玉 豊	30	陸
			浅岡 哲史	30	海
	担当補佐	総 務	眞弓 康次	31	陸
			小田 英明	31	陸
		会議運営	小俵 和之	31	海
		新規事業	荒木 哲哉	31	空
		国際交流支援	前川 耕治	31	陸
			津田 昌隆	31	空
			坂尾 陽子	常勤	
人 事	部 長		渡辺 辰悟	29	陸
	副部長		後藤 一郎	29	陸
	担 当		古賀 安彦	30	陸
			淵崎 直樹	30	海
			宮本 裕徳	30	空
	担当補佐		川上 陽	31	陸
			来田 昌範	31	海
			野澤 隆一	31	空
経 理	部 長		大林 一洋	29	海
	副部長		橋口 信吾	29	海
	担 当		小山 武徳	30	空
			浦野 与志生	30	陸
	担当補佐		佐野 光	31	陸
			今村 靖弘	31	海
事 業	部 長		西村 弘文	29	空
	副部長		重信 勝利	29	陸
	担当	HCD/HVD	大西 正浩	30	陸
		HCD2	川原 梅三郎	30	海
		テニス/支部	森末 浩史	30	空
		囲碁等	時久 寛司	30	海
		ゴルフ/講演	益子 卓	30	陸
	担当補佐	HCD/HVD	永井 克征	31	陸
		HCD2	伊藤 辰彦	31	海
		テニス/支部	朝倉 譲	31	空
		囲碁等	前田 丈典	31	海
		ゴルフ/講演	池ノ本 八郎	31	陸
広 報	部 長		大森 俊之	29	陸
	副部長		坂間 輝男	29	陸
	技術顧問		村田 和美	17	陸
	SA（システム事項）		時藤 和夫	29	空
	SA（SNS事項）		鶴見 知樹	29	陸
	担当	HP	岩崎 仁彦	30	空
			中津 敏文	30	陸
		機関紙	野崎 忠明	30	陸
			池田 五十二	30	空
		人材バンク	鵜村 佳和	30	陸
			荒川 純一	30	海
	担当補佐	HP	生田 孝治	31	空
			森永 秀作	31	陸
		機関紙	岡部 勝昭	31	陸
			萬 昌裕	31	空
		人材バンク	徳橋 浩志	31	陸
			佐藤 恭弘	31	海

◇令和５年度小原台事務局員名簿

職　　名			氏　名	期別	要員
小原台事務局	事務局長		久保田　隆裕	38	空
	事務局長補佐		寺田　博之	33	海
			大石　徹郎	36	空
			井上　亙	38	陸
	総務部	部長	中澤　信一	28	海
		補佐	小堀　紀子	40W	海
			天貝　崇樹	36	空
			佐久間　祐樹	49	空
	人事部	部長	別府　万寿博	36	空
		補佐	久保　明義	42	陸
			多久　涼平	58	陸
	経理部	部長	小林　伸嘉	36	空
		補佐	岩切　宗利	37	陸
	事業部	部長	村上　強一	31	空
		補佐	永田　和人	38	陸
			矢内　智也	42	海
			出口　紋子	54W	陸
	広報部	部長	柵木　徳之	41	陸
		補佐	時吉　　誠	43	空

◆編集後記

新型コロナウィルス感染の影響は未だ継続しており、残念ながら、多くの同窓会行事が縮小または中止となりました。かかる状況におきましても、ご寄稿いただきました方々はじめ、各行事及び事業にご支援頂きました皆様方の熱意とご協力により令和5年度機関紙「小原台だより」を上梓することができましたことに、この場をお借りして心より厚く御礼申し上げます。

「小原台だより」第30号は、電子版として第8号の発刊となりました。引き続きホームページアーカイブとして、記録保存の意義を重視し、同窓会の年度の総括として役立つように努めて参ります。今後とも電子版「小原台だより」のご愛顧とご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

（防衛大学校同窓会本部事務局　機関紙担当　記）